651
26

0053520001

0053520-001

651-26

伊那民俗叢書

伊那民俗研究会・編

信濃郷土出版社

第1－2輯

昭和8－9

AIA

36 10.11

伊那民俗叢書

第一輯

山の祭り

伊那民俗研究會編

2412

伊那民俗叢書 第一輯

山の祭り

伊那民俗研究會編

昭和八年 帝國圖書

65-26

序

村々に於ける古い時代の生活組織や信仰や、或は又其の背後に動く人々の心意とか云ふ事は、今日私たちが日常に見聞して居るものよりも遙かに異種異樣で、又其の上に根底の一層深いものがあつた。それが何時とはなしに、恰かも朝の空の星の樣に、一つ消え二つ無くなつて、私たちが漸く夫れと氣付く頃には、も早や拾ひ上げる數さへも殘り少なくなつてしまつて居る。私達は今日、變遷の劇しい時代文化の巷に立つて、遠く去つて行く此れ等の後影を淋しく見送るより外はないのであつた。

此の伊那谷の村々の民間傳承も、此れを研究せんとする學問よりも消えて行く方が一層早かつた。函の中に藏つて置けばそれで濟むものとは違ひ、此れは文字の力にでも賴らなければ到底保存は覺束ない事であつた。此れまでに蒐め得たもの〻一つ〳〵を兎に角に纏めて公にして置くと云ふ事は、保存に對する一番の早道であり、又後から來て既往を顧んとする特志の人たちにとりても都合のよい手引きでもあつた。

信仰と生活との一致が今も尙ほ昔のまゝに續く伊那谷の南端、三河の國境近きあたりの山村に今日殘つて居る祭禮行事の神秘と其の藝術と、それも亦やがては私たちの眼の前を空しく消え去らんとする後影の一つであるやうに思はれる。私たちは今の中に此れ等を調査蒐集して、其の祭祀の根底をなして居る信仰と、そして其れを今日まで維持して來た村々の生活組織と云ふ樣な事を究めて置かなければならないと思ふ。此の會が此の度伊那民俗叢書の第一輯に於て此の書を公にする所以も亦此所に在つたのである。

山村に於ける古い祭禮行事のすぐれたる信仰と技藝とは、此の書に採錄せられたもの以外にまだ幾つかゞ殘されて居る、それ等は他日を期して公にしたいと思つて居る。

交通に全く惠まれぬ山村深く訪ね入りて、此れ等の貴重なる資料を調査蒐集した同人諸君の勞は感謝に堪ない所である。

昭和八年十一月

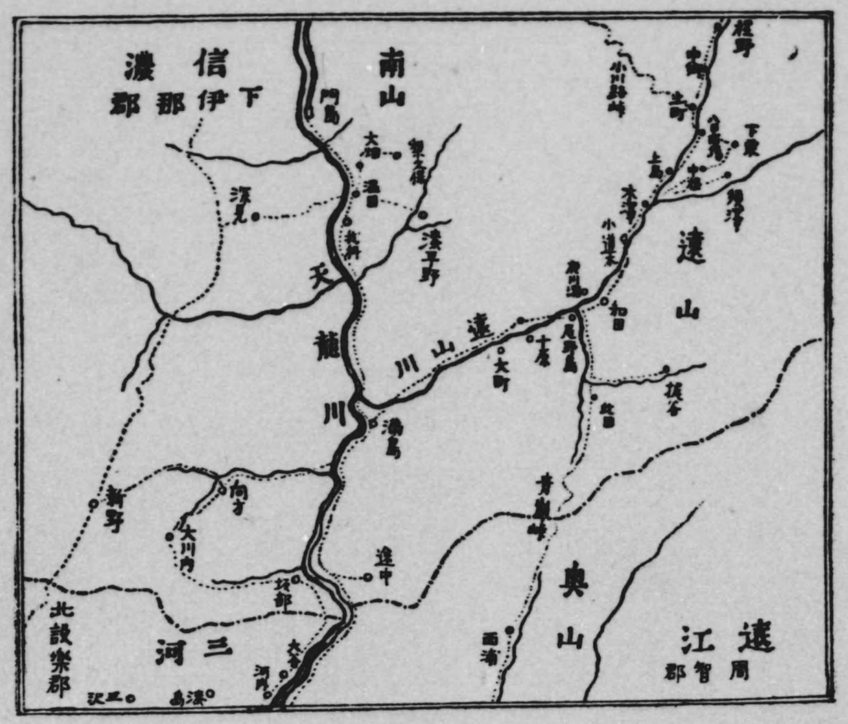
伊那民俗研究會　岩崎清美

目次

遠山の霜月祭り……一
はしがき……一
木澤の祭り……六
木澤の八幡社　宵祭り　本祭り　木の根祭り　囃し詞
上町の祭り……三四
上町の正八幡社　宵祭り　本祭り
下栗の祭り……六三
下栗の正八幡宮　宵祭り　本祭り
和田の祭り……八六
はしがき　祭り
霜月祭りの日取……九四
霜月祭りの次第……九六
坂部の冬祭り……九八

はしがき……九八
諏訪神社……九九
祭場　忌　祭に關する言葉の說明　祭の次第
榑木祭り……一三一
榑　木……一三一
榑木祭りの今昔……一三四
祭りと部落……一三〇
溫田の諏訪神社……一三一
祭の準備及祭具　踊行列の出發　南宮の境內の行事
御榑木の歌……一四七
笠揃への歌　館ほめの歌　宮ほめの歌　笠破きの歌
深見の夏祭り……一六〇
水の祭り……一六〇
池と神社　祭りの準備　宵祭り　行列　渡御　還御　三國　本祭り

霜月祭りを行ふ村
（木澤附近　×は村の社）



山の祭りを行ふ地方
（伊那谷の南部）

山の祭り

遠山の霜月祭り　牧内武司
南山の榑木祭り　調査執筆　中島繁男
深見の夏祭り
坂部の冬祭り　調査執筆　武田彦左衛門

遠山の霜月祭り

はしがき

江儀遠山庄と云ふ詞は霜月祭りの中に偶々現れてくる詞である。また『東鑑』にも『文治二年信濃國之貢未濟ノ庄江儀遠山』と記されてゐる。江儀と云ふ冠詞は美濃の遠山庄との區別を明かにする爲の古い名稱だとされてゐる。また信濃之古圖にも駿河との國境に江儀山と出て居るが、現在の遠山では江儀なる地名も山の名も聞かれぬ。卽ちこの江儀之遠山とは近來稱される所の赤石山嶺中の聖嶽あたりに源を發する遠山川沿岸の山村一帶の總稱であつて、昔は門村（上村）木澤、和田、八重河內、滿島、鶯巢、の六ヶ村を遠山鄕と稱してゐたが、現在では滿島、鶯巢を除いた四ヶ村を遠山と呼んでゐる。遠山は其名の示す通り、峰巒重疊として雲の來往常に忙しい高嶺に抱かれて、人環を遠く隔てた山鄕である。この遠山の山村を訪づれんと欲する人は、西からすれば小川路峠、北からは地藏峠、南は遠江の奥山より靑崩峠が控えて居て何れも海拔五

千尺以上の峻險を越えるか、左もなくば天龍の急流を下つて僅かに口を開いた遠山川沿ひの崖道を遡らなければならぬ。この山村に住む人々は、急傾斜の山腹を切り開いた山畠に麥、粟、稗、豆蕎麥、蒟蒻などを主なる作物として、其處には極めて純朴な氣風と生活とが殘されて居り、また原始的な樣々な風物に出會はす事である。

山路を行くと思ひも掛けぬ路傍の巨石に注連縄が張つてあり、或は大木の根元に幣がさゝげられてある。そして山の神樣の實在を信じ、天狗を祀り山の狐を祭る有樣は、戸籍の明瞭な祭神を祀つた森の鳥居を潜るよりも、もつと原始的な匂ひの濃厚なるものである。不慮な災厄を被ればば直に神佛に其の理由を訊ねて額いて赦しを乞ひ、病人があれば藥を飲む前にまづ村の禰宜の門を叩いて祈禱を依賴する、また親類組合の者は病人の枕邊に集つて各々手に幣束を持つて心經を讀み、溪流に水垢離をとつて平癒を祈ると云ふ信仰に篤い山村の人々である。

次ぎに述べんとする霜月祭りはこの山村一帶に行はれる冬の祭りである。

高い山々のあて（山の頂のこと、遠山方言）に幾度か雪が白く訪れて、村の板屋根を霰の礫が叩く頃に、山の段々畑は一と刷毛綠青をなすつた程に麥が芽を吹く、里芋の串刺や御幣餅で『山の講』が濟まされると愈々霜月祭りの仕度に掛る。

まづ八重河内の梶谷に於ける拾二月朔日の祭りを舞ひ始めとして、彼方此方の村落を順次に濟まし、最終は、たけ（赤石や聖嶽）に近い山の素ッ峠の下栗の祭りを以つて舞ひ納めとしてゐる。

村人達は一般にこの祭りを『霜月祭り』と稱してゐる。其他に『遠山祭り』『かつぎ祭り』『押し祭り』『木の根祭り』などゝ云ふ異名があるが、矢張り『霜月祭り』と云ふ名稱が最も正しいと村人は謂ふ。

此の『遠山祭り』と云ふ名稱はかなり廣く一般に稱ばれて居る模樣であるが、之は遠山地方で行はれるが故に『遠山祭り』であると謂ふよりも、此の祭りの內容を見ても肯かれる點が多々ある通り、領內の百姓一揆に敢なく殺された遠山樣一門の人々の靈を祀るが故に『遠山祭り』と云ふ名稱も別個に存在するのであつて、卽ち古來より行はれ來つた霜月祭り本來の湯立神樂の間へ遠山一族の慰靈を目的とする『遠山家の祭り』を差し加へて行ふに到つたのだと解釋する事も出來る。

祭りの日取表にも示す通り、現在湯立を行ふ部落は十六ヶ所を數へる事が出來るが、昔はまだ他の部落にも行はれて居た形跡がある。又二つの部落が合併して行ふ樣になつたなど聞く所も有る。どの村でも自分の村のお祭り自慢をするのを聞くけれども、比較的に古式の儘を踏んでゐる

のは上町らしく、續いて木澤、下栗、和田、程野及び小道木の御熊野其他に及んでゆくが、何れの部落も夫れ〳〵特長を持つてゐて、小道木の御熊野の如きは頗る人氣のあるお祭りの樣である。

『オモテ』とはこの祭りに使用する面に對する呼稱であつて『面』と云ふ呼び方をしてゐない。遠山各村の面の數を調べると隨分澤山な數に上り、いづれも異種異樣であつて、其塗色や形に至ると頗る興味深いものがある。

其數の最も多いと謂はれてゐるのは小道木の御熊野神社の九十餘面である。實際に使用するのは其半數にも滿たないけれど、年代を經て朽ち損じた面まで併せれば其の數になると云ふのであらう。次に下栗の八十餘面が多い。此處のは大野部落の面を持つて來て一緒にした爲めに多くなつたのであるが、祭の晩に冠つて出るのは四十五六面である。續いて和田の三十六面、木澤の三十一面、上町の十七面、程野の十五面、其他どの部落でも祭りを行ふ處には必づ幾個かのオモテが秘藏されて居る。この面の數も人によつては實際の數よりも誇張して話すから、一村內でも聞く人々で幾分づゝは違つて居るが、村人がこの面を神聖視する事は並大抵でない、上町や程野あたりでは祭りの時愈々オモテを被る役が廻つて來ると、千切れる樣な谷川へ飛び込み、身を淨めてから其役を勤めてゐる。また面が肌へくつ着いてしまつたと云ふ云ひ傳へに鑑みて

か、白紙を顏と面の間へ挾んで、直接に顏が面に觸れないやうにしてゐる。この神聖な木彫面へ靈氣が掛かると、躍如として生てくると云ひ、上町の面に就ては面盜みの傳說までもある。神原の坂部あたりにも獨りでに踊り跳ねると云ふ鬼の面の譚が殘つて居る。

この面造りに就ては、此處で最も古いと謂はれる下栗の面は、遠山川を遡つた山また山奧の、大木の根の瘤を以て造つたと傳へられてゐる。現在も易老渡の奧に『面の平』と稱する處があつて其處が昔其面を造つた場所だと云はれてゐる。比較的新しいのは上町の面で、之は同宿場の全燒の際に社殿と共に丸燒けになつたので、飯田町の彫物師をたのんで刻つて貰つたものだと云はれて居る。

面を被り、湯立をなし、舞を舞ふこの霜月祭りは、祭りの系統より云へば正しい神樂系の古式の祭りである。尙ほ知つて置かねばならぬ事は、此の祭りが兩部神道に依つて行はれてゐる事である。水干姿に冠を被つた禰宜が、左手に珠數を掛け、印を結び、九字を切る所作を爲し、唱へ詞其他一切が兩部に其根底を持つてゐる事を了解して置かなければならない。

兩部なるが故に、明治になつておかみよりお布令のあつた處の新しい祭典の樣式と、種々なる葛藤があつた模樣であるが、永い間この遠山に行はれ來つた兩部の篤い信仰の殿堂は其のまゝ崩

れずに、昔ながらのものさびた霜月祭りの神樂古式を、今に至るまで遺し傳へてゐるところは、流石に物堅い村人の心情と純朴のほどが偲ばれて尊く思はれる。

木澤の祭り

木澤の八幡社

木澤の八幡社は、西方の峠より流れ落ちる三ッ澤が遠山川に合流する地點に、木澤宿と淺い谷一つ隔てた杉檜の杜の中に祀られゐる。社殿は間口五間に奥行四間の拜殿を兼ねた舞舍と、五間に三間の神殿と、側に禰宜の控所たるしやうじやと、炊事場の附屬がある。

同社關係の古文書に『正八幡宮壹ヶ所神主彦太夫、文龜二壬戌年遠山土佐守御建立寛文二年御代官市岡利右衛門修覆』とある。建立以來相當な星霜を閲してゐる譯である。霜月祭りが行はれる遠山鄕の一帶、何れの社へ行つても八社の神と云ふのが祀られて居て、木澤にも矢張り其れが有る。同村山崎奥次郎翁の談に依れば、元和年間に領主遠山家の虐政に堪へ兼ねた百姓が一揆を起し、遠山家の一門八人を殺した、其後怨靈の祟りを恐れて八人の靈を祀つたのが此の八社である

と云ふ。現在は凡て十九座の神が祀られてゐる。境内は四百六十五坪、昔は遠山六ヶ村の總鎭守として巾を利かせた神社である。

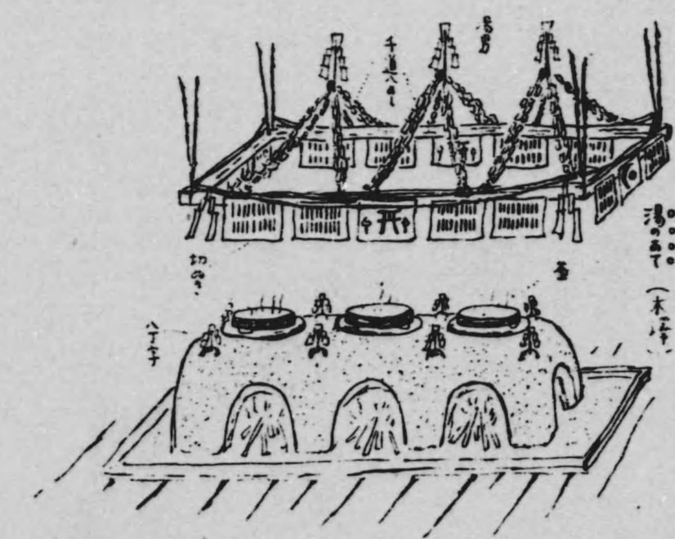
此處で行はれる霜月祭りは九日を宵祭りとし、十日が本祭り、十一日には木の根祭りを行ふ。これに與かる人々は神官一人、宮元木澤の禰宜の他に上島、須澤、中根、八日市場、小道木（こどうぎ）、河井の部落より各一名づゝと、他に氏子及び村民等である。猶ほ同社殿に秘藏してある御神像拾體の内には、高さ七寸七分の立像の僧形にて合掌せる正八幡像、また着彩で僧形姿の八幡樣、高さ五寸九分、其の他知來形の佛像等が衣冠及甲冑の立像と共に保存せられてゐるが、所謂僧形八幡で、昔の『歸命頂禮南無弓矢八幡大菩薩』と云つた當時が偲ばれる。

宵祭り

十二月九日（新暦）の正午頃より、木澤部落の氏子は各戸三束宛の薪を背負ひ、米を集めて八幡社に集合する、社殿の側に積み上げられた薪は湯立に焚くのであるが、概ね山から伐つて來たばかりの生木なので、祭りの時には社殿内は一ぱいに燻つて煙たい事は一通りでない。

祭りの準備　禰宜は神殿に莫蓙を敷き『刻物』と稱して幣束其他祭りに要するいろ〳〵の物を切り、他の者は山から新しい土を運び來つて釜くどを塗る。この霜月祭りに準備されるものを詳細に述べると左の通りである。

竈築と釜　拜殿の中央に在る大きな爐へ、新しい土を運び來つて湯立の釜を架ける竈を築く、昔は毎年新しく造つたものだが、近頃



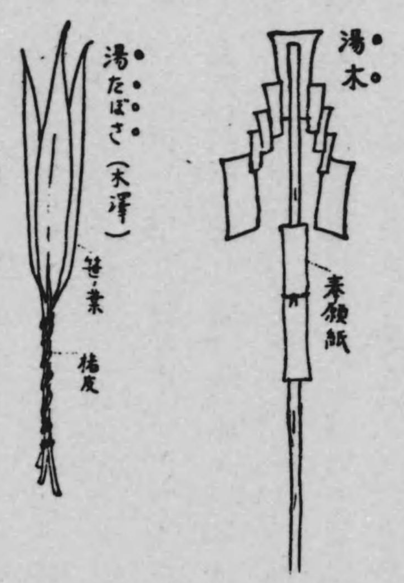
は一聯三ッ並びに半永久的に設備せられて、祭毎に竈築とは云ふものゝ、それはほんの部分的の修理に止つてゐる樣子である。この竈に架ける釜の數は三個で、神殿に向つて右が一の釜中央が二の釜、左を三の釜と稱してゐる。

八丁字　三ッ並んだ釜の兩側に八本の幣を樹てるが之を八丁字と呼ぶ。

湯蓋　釜の蓋であつて、厚い屋根板を三枚並べ、三

ヶ所を青竹にて裏表より挾み楮の皮にて結ぶ但し中央の竹はやゝ長く蓋をとる時の柄の役を勤める。

湯のあて　他に湯床又は湯げたなどとも云はれる。巾四尺ほどに長サ七尺位の板枠にて上の梁から繩にて四隅を結び、湯立の釜の上を覆ふが如く吊りさげられ、これで切抜き、千みち八あし等の重要



な刻み物を支へてゐる。

湯男　湯のあての上方に位する幣を湯男と稱し、この湯男の存在が神樂系統の湯立であるか否かを決定する重要な幣であつて、木澤には此の湯男が有る。この湯男の側に豆一握程を白紙に包んだのを結び着けてある、此れを湯たぼさと稱ぶ。

湯木　氏子の内より

祈願の筋あるものが、御立願を籠めた奉願帳を、長い竹の幣の中央に觀世よりにて結び附けたのを神殿に捧げるが、これを湯木と稱し、禰宜が湯を合せるに用ひるこの祭りに重要な品である。湯立開始前に『湯木渡し』なる役目を禰宜の中より一人定めて置いて、神前より捧げて來て湯合せをする者に渡す事になつてゐる。

湯壺　別に湯筒とも云ふ。青竹の筒にて下方に節があり、上端に紐を付けて下げられる樣になつてゐる。祭の終りに近く釜割りの行事の前に、湯立の御湯を此の竹筒に詰めて當日祈願を籠めた人に渡す。

湯たぼさ　笹の葉二三枚を束ね、其葉柄を楮の皮にて卷いたもので、常に釜の蓋の上に置かれ、湯蓋を取る時に唱へ詞があつて、これにて蓋を二三度ポンポンと叩いて取り除く、或はまた禰宜が湯をはねてお淨めをする時に此の湯たぼさを使用する。

七五三引き　おしめには中じめと四方じめの二種がある。おしめは宵祭りに一本、本祭りに一本を張るが、氏子の内で特に宮神樂の御立願を掛ける者の有る場合は、宵祭り本祭り共各一本宛增加する筈である。この宮神樂の願のある場合は、祭の次第を重ねて今一回行ふ譯で、非常に長くなる、之を『一ぱた』と略稱してゐるが、昔はこの宮神樂の願を懸けるには、願主自身にも村に

も經濟的に負擔が相當に大きい故、親類や組合のものなど、相談の上でなくては容易に懸けられなかつたと云ふ程の大願であつた。

千みち八あし　湯のあての上の神男を中心として、恰も裝飾かなどの如く一聯となつた紙が、一ヶ所に四本宛三ヶ所合計十二本が四方へ伸びて、湯のあての枠ぶちの七五三縄へ連つてゐる。之を千みち八あしと稱してゐる。

切抜き　用紙は中折の紙に鳥居に燈籠、日天月天、九格子、の三種を刻み使用して居るが、老人の談に依ると、昔は立花、おみきすゞ、下り藤を刻んだと云ふ。これを湯のあての兩面へ五枚宛十枚、左右側へ三枚宛六枚、合計十六枚を貼るが、所謂十六ぜんとは此の切抜きを云ふのではないかとも思はれる。

さて愈々祭りの準備萬端が整ふと、夕刻の五時頃より宵祭りが始まる。

釜潔め　準備の出來た釜クドに向つて祓をなしつゝ歌ふ神樂歌

この土は何處の土ぞ　ヤンヤハーハ　山越えて七山越えて
この釜はいづくの釜ぞ　ヤンヤハーハ　里越えて七里越えて

この水はいづくの水ぞ　ヤンヤハーハ　河越えて七河越えて
この焚木はいづくの仕立て　ヤンヤハーハ　山越えて七山越えて

注連張り　おしめには中じめ、四方じめの二種がある。

お靈舍の正面の注連を引く時の歌

禰宜『引くよしめ正面のおしめ　ヤンヤハーハ』
大勢『引くよ引く七重も八重も　ヤンヤハーハ』

宮張りの注連を引く時の歌

禰宜『引くよしめお宮のお注連　ヤンヤハーハ』
ウラ『引くよ引く七重も八重も　ヤンヤハーハ』

鳥居の注連を引くときの歌

禰宜『引くよ注連鳥居のお注連　ヤンヤハーハ』
ウラ『引くよ引く七重も八重も　ヤンヤハーハ』

注連を張り終り、其中へ神々を請づる時の歌

禰宜『東方大神のまします道を　ヤンヤハーハ』

大勢ウラ『清むには三浦の塩で　ヤンヤハーハ』

以下續いて南方、西方、北方、中方と順次に歌ふ。

十六のお神樂　湯立をなし　太皷笛にて囃しつゝ神樂をあげる。

四ッ舞　右手に鈴、左手に扇を持てる四人の禰宜が、始め五方を踏みて舞ひ、散らしに歩を刻みつゝ鈴を朗かに鳴らしつゝ釜を一周し、次は刀と鈴にて五方を踏み、散らしに舞ひ、湯立釜を一周して終る。

以上にて宵祭りの行事は終了し、其場に於て明日の本祭りに於ける役割のうち最も大役とされてゐる大天伯（ヒーノー様）と小天伯（ミーノー様）の面を冠る役の人選が行はれる、但しこれには各部落を順次交代にて勤める事となつてゐる。

囃子の樂器

一　太　皷　　一人
二　笛　　三四人

囃子の調子は八拍子なりと云ふ。

本祭リ

お潔め　この霜月祭りに與かる禰宜氏子一同が、神殿に集りお潔めを爲し、愈々祭りが開始せられる。

神名帳　奠菜を二ッ折りにして四隅に幣を立て、其中央に氏子惣代の者が座して恭しく神名帳を捧げて披げると、大勢にてやがて莊重な神樂歌が初まる。

『冬來ると誰か告げつら　ヤンヤハーハ　北國のエーヨ　あゝ北國の時雨の里に　ヤンヤハーハ』と歌ひ終るや直に之に次で神名帳を讀みあげる。（神名帳の詳細は上村の項參照）

十六の御神樂

歌

冬來ると誰が告げつら北國の時雨の雲にのりてまします
山神そだちはいづく奥山のそやまの奥榊にまします
水神育ちはいづく河下の七瀨やしもの榊の葉にまします

（神樂歌は上町及下栗と同じ、其項參照）

玉の御神樂　一同座にありて聲を和し、禰宜がモトを唱ふればウラを大勢にて唱へ、交々に唱へる。

モト『梵天帝釋、玉の御神樂』
ウラ『參らせるそれ聞し召す』
モト『梵天帝釋、日光月光』ウラ『參らせる　それ聞しめす』
モト『梵天帝釋、天神七代』ウラ『參らせる　それ聞し召す』

以下續いて地神五代、七曜九曜、明星方、二十八宿、各々を唱へ最後に

モト『たまとるらんよ』ウラ『そーれのたほりや玉にほろー』

と唱へて玉の御神樂が終るや、七人の禰宜が各々二本宛の幣を左右に持ち、湯立の釜の前に向つて神殿の正面に三歩前に進み、釜の上に幣を差し伸べて唱へ言は、

『遠山伴野之庄、方宇の湯立の祭典只今始まり申す、天下泰平國土安全』

三歩後に退り、手に持てる幣を背に差して其處に敷かれた奠菜の上に座し、前方に鈴と扇子を置き、次の五大尊の唱へ言をする。

五大尊

東方くんだりやさん明王　木の玉を持ちて左の前に立ち切り守らせ給ふ

南方くんだりやさん明王　火の玉を持ちて右の前に立ち切り守らせ給ふ

西方くんだりやさん明王　金の玉を持ちて右の後に立ち切り守らせ給ふ

北方くんだりやさん明王　水の玉を持ちて左の後に立ち切り守らせ給ふ

中方くんだりやさん明王　土の玉を持ちて中に立ち切り守らせ給ふ

と、五方の唱へ言各一章毎に日輪印を結び、膝の上を撫で、左の腰脇にて左手は鞘形、右手は劍形にて劍印を結び、サッと拔き放ちて、臨、兵、鬪、者、皆、陣、裂、在、前、の九字を縱横斜に切る。

湯木舞

湯木二本を左手に、鈴を右手に持てる三人の禰宜、釜を一巡して元の位置に戻り、鈴を腰に差し、湯木を兩手に持ちて

モト『おんしろたいほう(幣のこと)もろ手に持ちて』ヤンヤハーハ

ウラ『拜むには四方の神』ヤンヤハーハ

先湯　この行事は別に式の湯とも稱し、七回同じ湯立をするが故に七くらの湯とも云ふ。湯木

渡しより受け取つた二木宛の湯本を持つた三人の禰宜は、湯立の釜の前に立ち『こんさら〳〵と立つ湯靜かなる』と唱へ、笹の葉の湯たぼさにて蓋の上を輕く二三度叩いて後に釜の蓋を傍へ取り置き、右の手に湯木二本を重ねて持ち、之を恭しく目八分に捧げ、一歩進みて湯木の未端を沸き立つ湯の中に入れて二三度搔き廻し、湯木を引き一歩退いて立つ、之を湯を合せると稱してゐるが、一回合せる毎に禰宜がモトを唱へ、大勢がウラを唱和して、拍子をとり太鼓と笛にて神樂囃子を賑かに囃し立てる。

大勢にて唱和するウラの囃し詞は『おみかげこぐそ　こんぼとのぼれ』と歌ふ。(囃し詞の項參照)禰宜は湯を合せつゝ、梵天帝釋、日光や月光、七曜や九曜、三ッ星、宵の明星、夜あけの明星、天神七代地神五代、人皇三十六代、內宮外宮、出雲の神社、諏訪大明神、壹の宮二の宮方を呼び立て、次は遠山各村落に祀られた神々を順次に　上村村社、姫宮神社、和田諏訪神社、八重河內村社、八日市場の日月大神、上島の白山大神、須澤の八幡大神、三社大神、兩天伯大神、中根の五神大神、天滿天神、ねの神大神、遠山大神、河井のおだい明神、小道木の御熊野三社、白山大神、其他遠山のあらゆる祭神を讀み立て、最後に地元の木澤村社、小嵐稻荷、お山塚、親代様までの湯を合せる。一回が終りとなるや、復々之を繰り返して行ふ事七回に及ぶが、第七回目が愈

々終ると湯じりを切つて終りとする。

太夫舞（やをとめ）

鈴と刀を持てる二人の禰宜が、第一の釜側にて五方を踏み、續いて散らしにて舞ひつゝ釜の周圍を巡つて居る時に、舞戸の東北隅の一角に小幣束六本を藁束に樹てたのを圍んで、他の五人の禰宜が鈴を打ち鳴らしつゝ、やをとめ（八乙女）の謠を歌ふ。

やをとめの歌

やをとめは花の八乙女　今宵はこゝに月待ち日待ち
一の宮三社の森に打つ鼓　天ではながちさゆじに
昔は袖に今は袂に　あまりこそありけり
近所幸ひ一の宮の　大廣前に謹み敬つて申す

宮潔め　神官始め禰宜一同が、沸き立ち返る三つの釜の湯を柄杓に汲み合せ、先づ神殿の御靈舍前に到り、神樂歌の『七濱や八濱の潮を結びあげのさ潔まれと云々』と歌ひつゝ、青き笹の葉を束ねたる湯たばさにて柄杓の湯を四方にはじきはね飛ばしつゝ、宮潔めと稱して神殿を潔め、次

は神殿の西に隣接せる禰宜の控へ所たる精舍（しようじや）を潔め、次は祭りの炊事萬端をする『へつゝい』の間を潔め、拜殿の横手を廻り表口より舞戸の中へ湯を跳ね潔めながら入り來り、釜の前まで來て終りとする。

四ッ舞　釜の前後に各二人宛、四人の者が扇子と鈴を翳しつゝ、シヤンリコシヤンリコと鳴らしながら、始めは五方を踏み、續いて散らし舞の樣式は例の型の如く一周するや、次は鈴と刀を持ちて舞ふこと前の如くである。

御立願ばたき　湯木渡しの役の者が神前より捧け來つた湯木三本を、湯立釜の前に座した三人の禰宜に渡すと、三人は共に同じ動作にて、幣の竹の中央に觀世よりにて結び附けられた奉願帳を解き拔げて、神殿に向つて御立願の趣を讀みあげる。之は一回に三通宛を濟ますのであるが、御立願帳の有らん限り幾十回となく行ふもので、此の御立願を籠められた奉願帳とは左の如き樣式に中折紙に認められたもので、願主自らの御立願と、他人の爲に願を掛ける見舞の願との二種類が有ると見てよい。

奉願帳

一、正八幡大神様に　來ル十二月十日大祭ニ十二立願上申候
一、小嵐稲荷神社様に　同
一、白山大神様に　同
一、熊野三社大神様に　同
一、五社大神様に　同
一、宇佐八幡三社大神様に　同
一、日本惣社大小神様に　同

昭和　年　月　日

願主　木澤村
何　某

可目出度

何年ノ男
何々ヲ祈
願成就祈

山村に生活する人々に一年の間には様々な吉凶禍福が降つて湧き出る、思ひも寄らぬ禍に胸を痛める者、或は病の床に呻吟する人、又は遠く隔てた人の幸ひを希ふもの、家内の安穏を祈るもの、悲戀あり悲願あり、老若男女が思ひ思ひの願を神に懸けて切ない胸を訴へるこの奉願帳は、如何なる年でも百二三十通より下つた事はないと云ふ。

三人の禰宜はこの澤山な御立願の趣を神の前に讀みあげ終ると、之を束ねてユラユラと立ち登る湯氣に清められた湯のあての枠に載せて置くのである。

四ッ舞　扇と鈴を持ち五方を踏み、散らし舞にて一回、劍と扇にて五方を踏み、散らしにて舞ふ事例の如くであるが、この四つ舞とは一行事濟む毎に行ふ舞であつて、一仕切りの別を示す舞の意味にもとれる。

天伯の湯　村内の氏子一戸一人宛が各々小さな幣二本を兩手に持ち、異口同音に唱和する詞左の通りである。

大天伯の湯殿に渡る　ヤンヤハーハ
小天伯の湯殿に渡る　ヤンヤハーハ

以下同じ要領の詞にて、富士天伯、辰己天伯、朝日天伯、夕日天伯、平松天伯、てろう天伯、宮天伯の順に進み、終りに『たまとるらんよ』と唱和して天伯の湯は終る。

禰の舞　この舞は他に裝束舞、又は仕度の舞などの別名がある。赤い木錦の布にて甲斐々々しく禰を綾どり鉢巻をして、釜の前後にて二人一組にて四人が鈴と扇を手にして舞ふこと一回、次に刀と鈴を持ちて舞ふこと一回、矢張り釜を中心に一巡するのであるが、此の禰の舞は左に記す通り複雜した舞ひ方である。

禰の舞、舞方

イ　トロシ　靜かに舞ふ。
ロ　腰掛け舞　一人が座して舞ふや、他の一人はこの背中に腰掛けたる形にて舞ふ。
ハ　つるみ舞　二人が脚を組み合せた形にて舞ふ。
ニ　合ひ舞　二人が向ひ合ひのまゝ舞ふ。

ホ　ゆりゆり舞　互に手を伸して相手の刀を握り合ひ、刀の間を潜りつゝ舞ふ。

中拂ひ　禰の舞が終る頃は眞夜半の午前壹時頃となり、中拂ひと稱して暫時休憩して祭りに與る人々が御夜食を執る。

神返し　これは五方の神々をお返し申すので、禰宜が一人にて太鼓をドンドン叩くと、他の禰宜が『梵天帝釋いまようましますヤンヤハーハ』とモトを唱へるや大勢が『七濱へかそげの駒に乘りてまします』とウラを付ける、續いて

東方の大神小神たちの降りて踏みならしたる底なれば惡魔はよける
南方の大神小神たちの降りて踏みならしたる庭なれば惡魔はよける
西方の大神小神たちの降りて踏みならしたる庭なれば惡魔はよける
北方の大神小神たちの降りて踏みならしたる庭なれば惡魔はよける
中方の大神小神たちの降りて踏みならしたる庭なれば惡魔はよける

鎭めの湯　三人の禰宜が五方に向ひ印を結び、九字を切り、湯木渡しより湯木を受取り、之を背に指して釜前の向つて神殿の正面に座し、五大尊を唱へる事始めの五大尊の如くであつて、立ちて湯木を手に持ち、それにて湯を合せる事も例の樣式で行ふ。

而して釜の上に湯木を水平に十字に組み『せん靜かなれ』と唱へ、前へ引きてまた釜の緣の上に二本を並べ置くこと椀の上に箸を並べた如くである。斯くて鎭めの湯は終る。

面（おもて）

イ　大天伯　神殿より赤く鼻高き面を冠り、褌を掛け、腰に刀を指して現れるや、大勢の人々は一樣に聲を揃へて『おでやつたおでやつた、ひいのう樣がおでやつた』と盛に囃し立てると一の釜の前に來り、五方に向ひ印を結び九字を切り、そしてグラグラと煮え立つ釜の湯を素手の儘にて左右にバッとはねて飛沫をあたりに散らし、直に腰の刀に手を掛けると、大勢の人々が『抜いたり指いたりャーハッ』と囃すに連れて、面は幾度となく腰の刀に手を掛け、劍印を結ぶ型の格構をしつゝ ソーレホイ の掛け聲にて前後に身も輕るく跳ねつゝ左に釜を廻つて神殿に入る。

ロ　源王大神　青味を帶びた面の色、半ば開いた扇を鈴にて打つ形にて現れる。

ハ　正王大神　同じく扇と鈴を持つ。

ニ　一の宮　女の着物を着た白く優しい表情の面にて、胸に榊の小枝を抱く。

ホ　二の宮　笑顏の面、同じく榊を持つ。

ヘ　八幡樣　白い裝束なり、八幡樣がおでやつたと見物が囃す。

ト　親代樣（おやしろさま）　茶褐色の面の色、オヤシロ樣がおでやつたと囃す。

チ　若殿八人　黑紋付の羽織袴にて、面は若者の表情のものが順次に出る。源王大神は遠山土佐守、正王大神は土佐守の息子、一の宮は奥方で、八人の若殿は是れまた遠山家一族の者、即ち口碑に傳はる所の百姓一揆で殺された遠山家一門の人々に關する面であると村人は稱してゐる。源王以下若殿まで、遠山一門の面が舞戸を廻つて神殿に入ると、次は

リ　子安觀音　木花咲耶姫の二人が女面にて赤い布で頭部を包み、懷に人形を抱いて出る、大勢の人々は『子が泣くに乳を呉りよョ　子が泣くに乳を呉りよョ』と囃すに連れて、抱いた兒を搖りつゝ、いとしくあやす格構よろしく、踊つて釜の周圍を一巡りする。

ヌ　四面　これを『よおもてと』稱するが、いづれも靈驗いやちこに、きつい荒い神樣の顏觸れが四人揃つたのだと村人は謂つてゐる。

金山様　眞赤な面にシャツ股引ばき姿
山の神様　赤く凄い形相にて輕裝す
秋葉様　これも眞赤き面の表情なり
金比羅様　赤い面に金色の眼光爛々としてかゝやき、白い房々とした顎髯あり

ヨーイヨーイ　ヨーイヨイッと大勢が力を罩めて囃すに連れて、四神は手を叩きつゝ最初はゆるやかに、次第に激しくなりて六尺より九尺ほども前後左右に跳ね飛び交ひ、時には見物の中央目掛けて高く飛び込む時もある。斯くして湯立釜を中心に跳ねつゝ居る間に、四神も見物人も次第に囃子につれて氣分が高潮して行き、踊りに伴ひ見物人も調子に乘つて軀を左右に搖り動かしつゝ拍子をとり、四神も空を飛翔するやうな形をして、全く祭禮中に於ける大勢の氣分の最高潮を示すの觀がある。

ル　神太夫爺婆　始め媼面の神太夫婆が懐に赤い布卷を入れ、手に榊の小枝を持ちて、お宮と人をお拂ひすると大勢の見物人を叩いて一巡りする頃に、翁面の神太夫爺が幣の紙をむしりたる湯木二本をバタバタ叩きながら、高らかに歌を唄ひつゝ出て來る。

『岡崎女(じょ)ん女郎衆はよいじよん女郎衆、よんべも乘らいたがまたのらいたヨイトソレ』と歌ひ始め、奇妙な身振りにて舞ひ歩るき、終りに待つてゐた婆さんと固く抱擁したまゝ、伊勢音頭のコリヤコリヤヤートコセを唄ひ乍ら、神殿の内へ隱れる。(木澤には上村の如く神太夫爺婆の關所問答無し)

ヲ　小嵐稻荷　小嵐稻荷は村の西方の木澤峠の中腹に祀られ、遠山中の信仰を集めてゐる著名な稻荷であるが、此處では白狐の面に赤い着物、赤い股引にて大勢の囃す　ヤーハイッ　の言葉に連れて舞戸中を跳ね廻る。

ワ　小天伯　『みづのう樣がおでやつた』の囃しにつれて、神殿より腰に刀を佩きて出で來り、一の釜前にて月印を結び、腕まくりをして沸き立つ湯を左右にはね飛ばし『抜いたり指いたりヤーハ』の掛け聲と共に左腰脇に劍印を結び、臨兵鬪者皆陣裂在前の九字を縱横斜にサッと切る事は最初の大天伯の仕業と同型である。村人の謂ふ處に依れば、面の役割のうちで、大天伯と小天伯の役が最も重要な役だそうである。又天伯の種類は多種類あるが、この大天伯小天伯が一番偉い天伯で、空を自由に飛び廻り、次の宮天伯は神社の森にのみ住んで居て社の建物を護り、祭りの日の旗の番をなし、種々な荷物などを守るものだと謂つてゐる。

カ　宮天伯　鋭い表情の面にて、眞直な劍を持ちて現れ、始め五方を踏み、劍を逆手に持ち、之にてしやくるが如く劍を側と背後に使ひつゝ、四隅を翔け廻り、次は劍の持ち方を替へて劍先を先方へ向け、恰も鐵砲にて狙ふ如き姿勢を執り『ためたりよ　ためたりよ』の囃し言葉につれて激しく三歩前進しては二歩戻りつゝ跳ねて神殿中に入る。（以上にて面は終りとなる）

湯壺　御立願の人々に、竹筒に湯立釜の湯を詰めて渡す。

釜割り　褌を掛け、腰に刀を佩ける三人の禰宜が、左の如き唱へ言を交しつゝ、釜クドの周圍を一周する。

禰宜ノ一『八丁字をすでにまぐそにする人は』
禰宜ノ二『ちんひろ』　禰宜ノ三『なんひろ』
禰宜ノ一『湯たぼさをすでにまぐそにする人は』
禰宜ノ二『ちんひろ』　禰宜の三『なんひろ』

右の唱へ言は釜クドの正面に廻つた時は八丁字云々と唱へ、側面に到る時は湯たぼさ云々と謂

ふ更に續いて禰宜がモトを唱へ、大勢がウラを唱和すること例の如く

モト『御金山の腰に召したる　ヤンヤハーハ』
ウラ『錆刀　抜いたるのちに　ヤンヤハーハ』
モト『梵天帝釋の腰に召したる　ヤンヤハーハ』
ウラ『さび刀抜いたるのちに　ヤンヤハーハ』

と唱へ、腰の刀を抜いて湯のあての日天月天、鳥居燈籠、九格子、其の他の紙の刻み物をサッと切る、『そら切れるそら切れる』と云ふ囃しに連れて湯のあての四方を切つて廻り、又元の釜前の位置に戻り、刀を左の肩の上に高く振り冠り、スツと釜を切り割る形よろしく振り下ろして湯立相濟みの釜割を行ふ。

かす舞　かす舞と云ふのは何の意味か明瞭でないが、大體この祭りが終りに近づき、湯立の釜割りが濟まされた故に、後に殘つた窯を崩し壞すための樣式とも思はれる舞ひ振りである。即ち右手に鈴、左に湯たぼさを持ち、足を上下して之を蹴り、湯たぼさにて窯を掻き散らすの形を四方に於て行ふのである。民俗の云ふ處に依れば、物の終極をカスと稱するが、霜月祭の行事の終りの舞故に斯く呼ぶかと思はれる。

次に禰宜モトを唱へウラを大勢で唱和しつゝ

モト『東方の神々　つとめてこぐそ』　ウラ『あそび候間に夜があけた』
モト『南方の神々　つとめてこぐそ』　ウラ『あそび候間に夜があけた』
モト『西方の神々　つとめてこぐそ』　ウラ『あそび候間に夜があけた』
モト『北方の神々　つとめてこぐそ』　ウラ『あそび候間に夜があけた』
モト『中方の神々　つとめてこぐそ』　ウラ『あそび候間に夜があけた』

鈴を振り鳴らしつゝ歌ふ神樂歌

『峰は雪ほなかはびしよろ裾は雨ヤンヤハーハ
『十二しめに手向くあすび奥山のくづちの奥の奥山のヤンヤハーハ

また鈴を振り振り、改まりて最終の唱へ詞あり、鈴をピタリと止めて後は鳴らさず。

〽木の宮のくづちの宮の　ヤンヤハーハ
宵はしめ夜中はしうれ前曉の神戻しをする人は命永かれ壽命久しかれ

以上を以つて木澤の霜月祭りは終りとなるが、この祭禮に與つた人々が爐邊に莫蓙や莚を敷き、

米や大根芋其他を味噌で煮た　オジヤ(雜炊)を、徹夜で舞ひ踊つた後の空腹に舌鼓を打つ時分は午前五時過ぎ、夜明けに近く、山々の頂に曉の色が漂ふ頃である。

木の根祭り

十一日の晝頃に、昨夜一睡もしなかつた眠い目をこすりこすり、小豆と米を一つしよに煮て之を『ごぜん』と稱し、この飯を白紙の上に載せたものを澤山拵らへて神前の面箱の上に獻げる。

この時の唱へ詞は

東方大神たち方宇の祭典差上申す
南方大神たち方宇の祭典差上申す
西方大神たち方宇の祭典差上申す
北方大神たち方宇の祭典差上申す
中方大神たち方宇の祭典差上申す

近所の大神たちの廣前に謹みて申す、天の榮國の榮までもあるほどの諸神がたへ、信濃之國、江儀之庄遠山ひさ立の方宇の祭典差上申す

祓

神はゆけ森はとゞまれこの里にまた來る冬も神呼び返す

（終）

（附）囃し詞

一、押してけ押してけよ（拜殿の裡で大勢が押し合ひつゝ囃す詞）

一、何處かのおじさはよう舞ふよよう舞ふよ（舞ふ人を賞める時に云ふ）

一、かゝさに一と舞ひ見せたいな見せたいな（先の言葉に次いでまた囃す）

一、そこらに嬶さは居りやせぬか（また續いて囃す詞）

一、おみかげこぐそ　こんぼとのぼる（湯立の時の詞である、御みかげこそは雲と登り霞となると云ふのが訛つて斯く唱へられてゐる）

一、おでやつたおでやつた（面が出て來る時の詞）

一、また出たよまた出たよ（同前）

一、道中早めて賴むぞよ（舞の步調が遲くなつた時）

一、調子を早めて賴むぞよ（同前）

一、子が泣くに乳を呉りよよ（子安觀音が子を抱いて出た時に囃す）

一、つるんだよ離れたよ（つるみ舞の時）

一、爺さ婆さ爺さ婆さ（神太夫爺婆を囃す）

一、そら切れるそら切れる（釜割りの刀を振る時）

一、夜が明ける夜が明ける（祭りが終りに近い頃の囃言葉）

註、右の囃し詞は祭りに集まつた人々が口を揃へて囃す詞である。

上町の祭り

上町の正八幡社

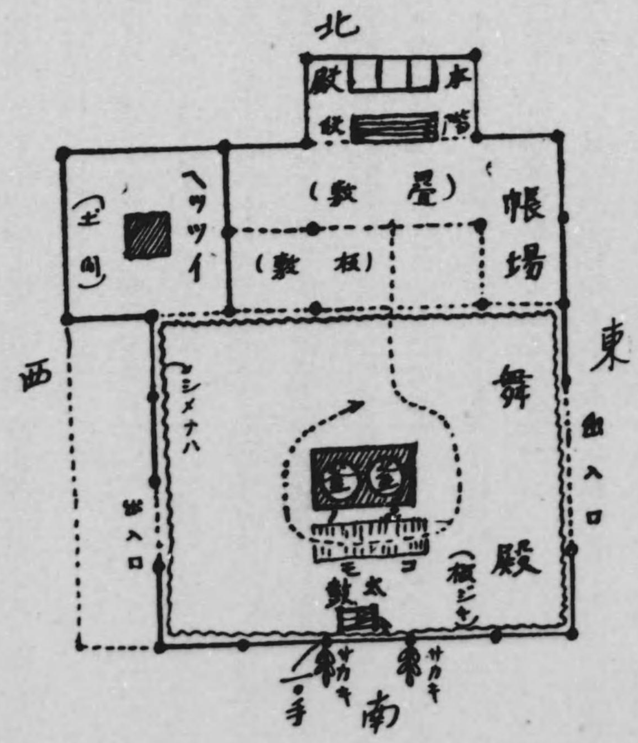
今は上村と書いてカドムラと訓むが、昔は門村であつた。此所には開發の當初から今の村社八幡宮のある所に一小祠があつたが、大風の爲に破壞されたので、文龜二年に大宮を建立し、正八幡宮、五郎姫宮、八王神の三社を奉齋し、日月木火土金水の七神をも併せ祀る事となつた。祭事には湯立と舞を行つて居たが、元和四年に遠山家一族が百姓一揆の爲に亡され、その後其の祟りが多かつたので、一族八人の靈を八社の神として、元和八年に合祀する樣になつた事は前にも述べた通りである。これは一に此祭が死靈祭と呼ばれる所以であるといふ。此大宮は火災にあつて燒失した爲に、明治二十一年現在の社殿を建立した。けれども祭事の方は昔より少しも變る所なく現在に傳へられて居るといふ。

遠山以外の地では此の冬の祭りを遠山祭と呼んで居るが、土地では霜月祭と言つて居る。昔は

霜月の祭であつたが今は新暦の十二月に行つて居る。上町の祭りはその十一日である。

上町の現在の禰宜は宇佐美虎之助氏であるが、八幡社の傍にはねんやといふ家があり、代々禰宜をつとめて此社の社守であつた。

社殿の構造　六



面四面のものであつたが、最近道路の爲に一部を改造した。圖は現在の形、點線はもとの形を示す。板茸、板壁。

舞殿　板敷で中央に爐がある。湯釜二つを置く太鼓の位置を樂屋と呼ぶ。そこの二本の柱には榊をつける。東

と西に出入口がある。

帳場　受付であり、世話人が祭の指し圖、記帳、會計等を行ふ所、舞殿より一段高く疊敷。

本殿　正八幡、五郎姫宮、八王神の三社を祀る。

ヘッツィ　土間で中央に爐がある、炊事場である。

圖中點線で進路を示したのは神前より出て舞人が進んで行く方向を示す。

爐の隅に1とあるは一の手、2とあるは二の手、一の手は方角が京都に當るからといふ。

世話人定め　舊暦十月十日に行はれる油屋旅館前の金比羅様の祭の時、その席で、當番の宮世話人といふ役六人を定める。之には一年間不淨の無かつた人を選ぶ。選ばれた宮世話人はその日神社に集り、御面役、願ばたきに行く役等を指名する。そして十二月十一日の大祭には帳元といつて帳場を受持ち、十三日には祭典費を計算し、集金支拂等會計を司る。

潔齋　神主は一週間前より精進潔齋して祭事に當る。

準備　十二月十日、宵祭の日の朝から始める。午前十時頃迄に氏子一同薪三束（約廿貫）づゝを持つて神社へ參集、これは祭の間に焚く物であるが、始終焚き續ける爲に一戸當りこれだけを納めなくてはならない程多くを要するのである。集つた氏子の中から炊事係二名が選ばれて各戸

から新米一升宛集てめ御飯を炊く。

精進の御飯　といつて夕食一回は皆して之を食べるのを例として居る。他に生炊といふ役が一人選ばれて甘酒を造る、又お白餅の役二人はお供へを拵へる。又御飯炊といふ役一人が定められる。

なほ湯の上の飾りの役が二人あつて湯の上の飾をする。（湯の上の項參照）

宮世話人と之れ等の役の人の他は藁を集めて注連縄ないをしたり、竈塗りをする。

竈塗り　新しい土を十二負ひ運び、すさを混ぜて練り、四本の生木の太いのにそれを塗りつけ縄で卷いては又塗りつけして、その四木の土柱の上に湯釜を置く、之が二つ並ぶ。

湯釜　並通の飯炊釜と同じ形のもので、鍔と胴の付根の所に釜褌と云ひて藁で三ッ打ちにした縄を一卷き卷く。

釜蓋　屋根板を三枚並べ、青竹を三ヶ所に當てゝ綴つたもの。

湯たぶさ　そよもの小枝、竹の葉などを束ねたもの。

青年は大幟十數旒を鳥居附近に立てて後祭事の手傳ひをする。

神主禰宜一同は早朝より『きりはやし』と云つて御幣、おわき、かいだれ、しで、ちみち、ひ

さげ、湯男（おとこ）、湯木（ぼく）等を作る。

おわき　三四間の木の先に藁を束ね、御幣五本を差したもの、宵祭り行事のおわきといふ時に之を立てる。（其項參照）

かいだれ　注連のかいだれである。

しで　湯の上の飾り、四隅（よすみ）ともいふ。

ちみち（千道）　湯の上の飾り、四邊につるされる、中央に鳥居の形がある。

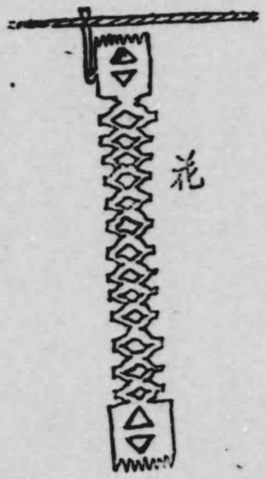
ひさげ　湯の上の飾り、四隅から出て中央で一つに集つて湯釜の上に垂れる。その一番下の三角形の所は火打の形を模したものといふ。

湯男　湯の上の飾り、もとは湯びいなと共に人の顔の形を切抜いた紙であつたといふが、今はこの湯男八本のみで湯びゝなはない。湯男は湯木と同じ形であるが、これには八ツ頭又は八橋とも、はしごともいふ物がつく。湯の上の南の方の縁へ八本並べてのせて置く。

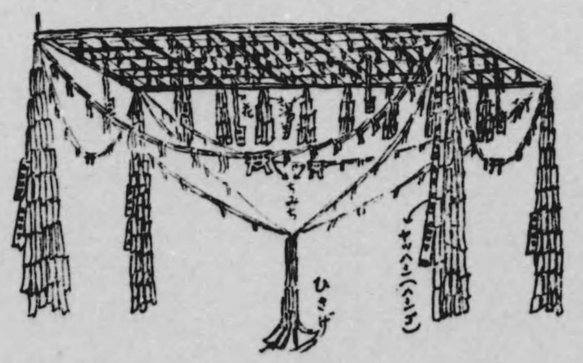
湯木　檜の割りつばなしの板に御幣をはさんだもの、長さ二尺内外。本は一つだが先は二枚に

割つてあつて、その二枚ともに御幣をはさんである。つまり二つ御幣を重ねた形、しかし本迄は割つて無いので本は一枚である、中程の所に白紙を巻いてしばつてある。

湯の上　湯釜の上につるす物で、縦横六本の檜の二寸角位な物を格子に組み合せたもの、大さは八尺四角である、それに縦横共に十二條づゝの注連を引く。宮神樂（願ばたき）のある時にはその倍になつて二十四條づゝ張る。かいだれ、花、それから前に記した千道、ひさげ、四隅のしで等をつるす。（圖參照）



準備が終ると、散ばつた物などを取り片附けて宵祭りの行事にとりかゝる。



湯の上

宵祭り

宵祭り順序

座揃へ
大宮潔め
おわき立て
御戸開き
あげのさ
しめひき
神舞

座揃へ は神官役員氏子一同神前に揃つて祝詞を奏上する事である。

大宮潔め には座着宮潔めの歌がある。

一 きよめする惣谷川の ヤンヤーハーハ 瀧の水落ちてきよまれ七瀧の水
一 七瀧や八瀧の水を ヤンヤーハーハ 汲み上げて宮潔まれと祝ひそめきよ

一 七浦や八浦の塩を ヤンヤーハーハ むすび上げて宮きよまれと祝ひそめきよ

續いて竈塗釜祓の神樂が上げられる。

此のほどは何國のほどよ ヤンヤーハーハ 岩越えて
此の釜柱は何國の柱な ヤンヤーハーハ 山越えて
此の釜土は何國の土よ ヤンヤーハーハ 谷越えて
此のすさわらは何國藁とよ ヤンヤーハーハ 里越えて
此の黒釜白釜は何國の釜とよ ヤンヤーハーハ 國越えて
此の水は何國の水とよ ヤンヤーハーハ 瀧越えて
此の白桶白檜杓は何國の檜杓な ヤンヤーハーハ 山越えて
此の白ひさげは何國のひさげな ヤンヤーハーハ 山越えて
此の釜蓋は何國の蓋とよ ヤンヤーハーハ 山越えて
此の湯たぶさは何國のたぶさとよ ヤンヤーハーハ くね越えて
此のはつちようじは何國のはつちようじな ヤンヤーハーハ 里越えて

此の湯男湯雛は何國のひなとよ　ヤンヤーハーハ　里越えて
此の千道八橋は何國の橋とよ　ヤンヤーハーハ　里越えて
此の花は何國の花とよ　ヤンーヤハーハ　浦越えて

斯うして爐、湯釜、湯の上にある總ての物を、之は何だ、之は只の物ではないといふ風に示して行く。

おわき立て　先に準備してあるおわきを境内の天伯様の前へ立てる、此所に祭がありますといふ神の天降りの目標である。

御戸開き　三社の御開扉を行ふ。

あげのさ　各社へ一本づゝ御幣を獻げる、計十九社へ十九本。

しめひき　舞殿の中に注連を引く、式は一本であるが、宮神樂（願ばたき）のある時には今一本を加へる、この時『七種の御神樂』といふ神樂が行はれる、その神樂歌

諏訪の池湖水の水を汲み上げて七五三きよまれと祝ひそめきよ
バシヤダラやバンシの水を汲み上げて宮きよまれと祝ひそめきよ

伊勢の國二見の塩をむすび上げてほど潔まれと祝ひそめきよ
伊豆の國三島の塩をむすび上げて釜潔まれと祝ひそめきよ
七浦や八浦の塩をむすび上げて森潔まれと祝ひそめきよ
七濱や八濱の塩をむすび上げて鳥居潔まれと祝ひそめきよ
白金や黄金の御戸を押開きもり參りてはげぎようめされよ
伊勢の國天の岩戸を押開き神現れて御座れ請ずる
打ちならすごすいの鐘に夢さめてあうんの二字をきくぞうれしき
吹く笛の笙ひちりきの音のよさよいかなる神もうれしかるらん
冬來ると誰かやつげつ北國のしぐれの森の禰宜やつげつら
きりはやし誰かや請ず伊勢の國ようだが森の禰宜が請ずる
打ちはやし誰かや請ず尾張なる熱田の森の禰宜が請ずる
おかはやしは誰かや請ず北國のしぐれの森の禰宜が請ずる
舞はやしは誰かや請ず信濃なる八幡が森のみこが請ずる
しめおしめしようじのおしめ幾重ひくひくやひくひく

（梵天帝釋より始めてあらゆる神々の名を讀み上げて）
何神のましますところをきよむには三浦の塩に七瀧の水
火を切りて水を生ずる誰もよい宮潔まれと祝ひそめきよ
何神のおりえの御座をあやを張り錦をかけて御座れ請ずる
東山小松かき分け出でる月西へはやらじこゝで請ずる
熊野山きりべの王子椰の葉をかた脊にかけて御座れ請ずる
伊勢の國ようだの森をはむ鹿は角を並べて御座れ請ずる
諏訪の湖水底てらすこだま石手には取れども袖はぬらさじ

神舞　氏神の舞とも言ふ、舞ふ人は二人で、扇と鈴とを持ちて舞ふ。

裝束は舞ふ人の着る上着は水干といひて白木綿、麻で出來て居る、襟首の所に俗にへゝと云つて三角形の布が着けてある、產衣には必ず着ける物だといふ、禰宜や主だつた人達は烏帽子を頂き、湯襷を結び目を背の方にして首に懸ける、紙緒の草履をはく。

本祭り

座揃へ　大宮潔め　宵祭りの行事と同じ、しめひきには宵祭りに引いた一本の上へ又一本を加へる。宮神樂のある場合は二本となる事すべて宵祭りと同じである。

神帳　神帳（じんちょう）といふ名の卷物があつて、それを禰宜二人が一の座二の座に並んで立つて聲を揃へて讀み上げる、卷物は一つであるから二人で持つて居て讀むのである。

神帳

ふゆ來ると誰かやつげつら　ヤンヤーハーハー
北國のといよぁゝ北國のしぐれのさと
山をめぐるは山をめぐみて敬白源の神主參り來り三てうの疊になほり大音の聲を小音にあげ小音を大音にあげ申て申さん事を聞入納受給り給へと謹而敬白とし月よき年號吉日始り申
年が中にてこんれい今年月に此月日にけふ今日只今がこくと申せば殊にもとりわけ霜月朔日はじまり申、十日にあまり十一日のにちじん、只今己午が入て神にりゆうみやう佛に和合か付、天にしらがねの花がさいて地にはこがねがふきたちのぼり、りうしんはみとはひらくる、たい

らはおさむる、祈は叶ふ、神かど神りうみやうかこくを申して申さん事をば雀の千聲よりも鶴の一聲聞入納受御禮賜れと謹で申　信州江儀の郡とものゝ庄遠山門村に御立ちはやらせ給ふ八社の御神、先期の正八幡、五郎姫宮、八王神、宮天伯まで只今此みしめのうお湯の上三寸へ請じすゝませ申す再拜々々と敬て申す

神者ひさう天にまします中には無邊方界下には金輪際界、なんえんぶしよう大日本國五畿内七道のみようじようおゝこうのちんじゆ八幡三社賀茂げしよう稲荷祇園大原春日住吉日吉松の尾吉田平野北野五山天神貴船赤山梅の宮山王七社の宮までも是迄奉請

東海道十五ケ國大神十五ケ所にまします

（十五ケ所の神名を讀み上げて）是迄奉請敬白

東山道八ケ國大神八ケ所にまします

（同　上）　是送奉請敬白

北陸道七ケ國大神七ケ所にまします

（同　上）　是迄奉請敬白

山陰道八ケ國大神八ケ所にまします

（同　上）　是迄奉請敬白

山陽道八ケ國大神八ケ所にまします

（同　上）　是迄奉請敬白

南海道六ケ國大神六ケ所にまします

（同　上）　是迄奉請敬白

西海道九ケ國大神九ケ所にまします

（同　上）　是迄奉請敬白

五畿内五ケ國大神五ケ所にまします

（同　上）　是迄奉請敬白

二島大神二ケ所にまします

（同　上）　是迄奉調敬白

惣じて大日本六十六ケ國の大小の神祇を奉請敬白、高き大神は五萬五千五百五十餘神たちのぶるいけんぞく、低き小神は十萬五千五百五十餘神たちのぶるいけんぞく惣じて天は二十八宿地は三十六さんの大小の神祇を奉請並に大どうの神のぶるいけんぞくこんがいらいまでも謹而敬

白

庭中にさかりがたてや
いは　けふ七日といよハア
けふ七日玉の御神樂まいらする

終の此歌は或は

庭中にさかりがたてやヤンヤーハーハ
けふ七日といよハアけふ七日
玉の御神樂まいらする

ではないかとも思はれるが、意味は禰宜にも餘りはつきり分らないそうである、かくして招いた神は『湯の上三寸』へ集つて來るといふ。此間に十九社の神々へお白餅（おそなへ）御神酒を獻げる。

申上　神帳が終ると續いて讀み上げられる、此時も二人で同じ樣にして讀む、その間に釜柱八本へ一本づゝ八ちようじといふ小幣を立てる。宮神樂の時には二本づゝ合計十六本となる。

申　上

七浦や八浦の塩を汲み揚げ申、流の冷水はだきの衣として宮本の神主參り來り三疊の疊になはり十の蓮華をさしあげ申し、百八本の珠數をもみやならしえびらの鈴をふりやならし黑釜や白釜とさわやき申していとうの皷の聲を打やならし大音の聲を小音にあげ小音の聲を大音にあげ申して申さん事を聞入納受給はり候、夫れ抑々當り來る年月善き年號吉日始り申す、只今御年〇〇何年〇〇〇御年なれば月の並びが十二月日の行く數が三百六十五かん日にも取分け今令此年霜月朔日始り申す、十日に餘りの日じん只今迄も子丑が入りて神に立命佛に和合が付天には白金の花か咲き地には黃金が吹き立登る龍神の扉を開く平は治る祈は叶ふ神かど神命立命新の石を取上申して申さん事は雀の千聲より鶴の一聲聞入納受給はり候と謹で敬て申す夫れ信州江儀の郡伴野の庄門村に御立ちはやらせ給ふは源王大神、政王大神兩八幡先旗の正八幡五郎姫宮八王神住吉日吉淀の明神一の宮に天伯迄も此湯の上三寸へ請じ申奉る。東方の王神は太郎の王神淨土を申せばお釋迦の淨土、方を申せば甲乙の方にて候。南方の王神は次郎の王神、淨土を申せば觀音の淨土、方を申せば丙丁の方にて候。西方の王神は三郎の王神淨土を申せば阿彌陀の淨土、方を申せば戊巳の方にて候。北方の王神は四郎の王神淨土を申ぜば御釋迦の淨土、方を

申せば庚辛の方にて候。中央の王神は五郎の姫宮淨土を申せば大日大小不動の明王、方を申せば壬癸の方にて候。一萬三千のみしめの王神、七萬七千はしめの御王、みしめの內へ請じ勸請申す。大日本六十六ヶ國の大小の神祇の御前所を千道八ッ橋十六天ひなの御前を引上申して八人の八乙女、五人の神樂男を打やそろへて御前所をたしなみ申して聞入納受給はり候。夫れ天のあふむらは羽を並べ翼は口を揃へて猪駒犬はけづめを揃へ土はふ虫は轆を定め富根が奥にさを鹿の八ッ顏耳に籔の鈴を振立つ如く、八社の御神の御前所をたしなみ申して申さんが爲宮本の神主參り來り氏子氏子の前迄も、流の冷水はゞたきの衣として岩のこばせに半帖たゝみ、まるねを致し松の葉よりもなほも細き榊の葉よりも尙も長きたんせいの葉込を申せば香味の御酒に紫のごりよう、白金や黃金のさんごう鮮かに見開き給へば御前所を嗜み申して三世の諸佛を給はるならばシンジヤ、ホンジヤ、キクジヤ、玉の御ほうでん迄も聞入納受給はり候夫れ夜に驚きなく晝に騷もなく夜をば戸長晝、をは間長、大刀につまげなく新の枕に傾無く、增見鏡に疊りなく箱にてちりるを算るが如く、瓜のつるゞ玉の枝までも御守り給り候。あんきよう明年若水變りて春の種をろしに取ては目にては强き葉にては廣き柄が七尺穗が三尺、實入を申せば石や金目の裝束也。秋の田へ迫地に千ぞく食地に萬ぞく刈りや納て國や九日數のつゝえを取や整

て大米千びつ小米千びつ善酒千べん白酒千べん取や整へ上參らせる程の御利生を給り候。桝に入換藏の下づみをはげくむ程の御利生を給り候。遺る所をいぎにかしけば鳳來寺の山となる。酒に造れば南海の海となる。飲とも減らず汲とも盡せず出ある澤程の御利生を給り候。夫れ商めうがを給はるならば今朝商が十萬貫晝商が十萬貫夜商が十萬貫合せて三十萬貫の寶を賣とな申せば申重も寶は藏の下積輕き寶は藏の上積藏の下積をはけくむ程の御利生を給はり候。夫れ無者の寶を給るならば春の蠶が十六膳、夏の蠶が十六膳、合せて三十二膳の白神の御神四度の起臥難なくくせ無く恙なく起させ給ふ。前の御世は鶴のこばせに造らせ給ふ前の堅さは前あるかもや河原の雌石雄石を存する如くに造らせ給ふ。夫れ六月の龍神綿むき上手に綿をむかせ糸とり上手に糸をとらせ、物の上手に綾や錦を織らせ七重がみとちやう懸參らせる程の御利生を給り候。遺る絹をば袖に參るに十二の小袖を袖口揃へ佛は參るに十二の小袖を裾口揃へ參るにいさみ下口にかんぞく上には一たい下には萬人の人に吹きあほらるゝ程の御利生を給はり候。遠くの人は聞き美み近くの人は見て樂む程の御利生を給り候。遠くに聞えしかすみにから風多方が風は十二ヶ中へ十二ヶ方あいやしづめて天滿神は天へ捲上すそまん神は大地七尺踏みや鎭めて七里が中へ十二ヶ方えいがの里福の里御守り給はり候と謹て敬て申す白神の神かきに代

りだんびら長社へ加茂が長社と謹んで敬て申す。

（句讀点は大体こゝなら間違いなからうと思はるゝ所にだけ打つた、勿論原文には無いのである）

先湯　烏帽子、水干を着た禰宜二人が釜の東側で一回と西側へ廻つて一回、釜に向つて居て火打石で火を切る、それで火を點けるのではない、火は既に燃えて居るのである、それが終ると扇と鈴とを持つて舞ふ。足は五方（東南西北中）を五足に踏んで初め右へ廻り、元の向に直ると同じ右廻りにくるりと早廻りして扇をかへし、今度は左手に廻り、次に早廻りをして扇をかへす。こうして順次位置を移して釜を一巡する。

湯だすき（上町）

一巡りして二人が一二の座に來て立つと、一人の人が湯木二本を持つて來て二人に渡す。湯木は左手に右には鈴を持つて先づ神座に向つて拜をなし、唱へ言、次に互に向つて拜をする、神への拜と人との拜である、次に五方に向つて神々の名を呼ぶ、神の名は産土神を初め伊勢大神宮から八百萬の神の名を呼ぶのであるが、しつとりといふ者が居て、その唱へ言の度に『のり下さで誰がおりる』と言ふ。かくして呼ばれた神々は皆湯の上のひさげへ集つて來る。

次に湯木を二つに割りて兩手に持ち、一足進んだり退いたりしながら、湯木は前で拜み合せる

様な形をしたり、下にさげたりしつゝ

おんしろたへをもろ手に持ちて拜むには

四方の神をまねきます

といふ歌を唱へる。

二本の湯木を一つに集め右手に持つて、湯木の串の元を釜の湯に入れて靜に搔き廻し、それを少しはね上げる、之を湯をあげるといふ。

此時には

（もと）　何々神の湯殿へ渡るヤンヤーハーハ

（うら）　湯衣は綾か錦かな

と唱へるが、もとを禰宜が唱へるとうらを一同が唱和する、一同の唱和は『おみかげこぐそ、おんぼとのぼれ』と訛つて居る。

此禰宜二人の舞を神の舞と稱するが、之は神官副神官くらいの資格のある人でなくては出來ない舞で、從つてこの神の舞は先湯と、御一門の湯と、鎭めの湯と、俗に役湯と言はれて居る此三つの湯立の時にのみ舞はれる。順序が前後するが最初禰宜二人が塩と大根の輪切を二枚と、火打

をのせた膳を持つて出て釜の東西で火を切る、その時に唱へ言があるがそれを五大尊と云ふ。これは先湯の時、御一門の時、鎭めの時と三回行はれる。五大尊がすんで後引續いて舞ふ舞を神の舞といふのである。

五大尊

東方には降三世夜叉明王木の王をもつて前に立ちきり守らせ給ふ
西方には大德夜叉明王と申して土の玉をもつて後に立ちきり守らせ給ふ
南方には軍荼利夜叉明王と申して火の玉をもつて右に立ちきり守らせ給ふ
北方には金剛夜叉明王と申して金の玉をもつて左に立ちきり守らせ給ふ
中央には大日大正不動の明王と申して水の玉をもつて中央に立ちきり守らせ給ふ
抑々頭には白金や黃金の鳥帽子を召し額に八葉の蓮華の花咲き兩眼には日月に開き口には阿吽の二字を含ませ給ひあびらうんけんの文字を結んで肩になげかけ腰にばくの縄を卷き足にけんばく靴を召し日を笠に月を蓑に星を集めて鎧と召し給ふ、呪文

先湯七立、或は七くらの湯と稱して、湯立を行ふ人が變つて同じ事を七度繰り返す。
宮神樂の湯　御立願又は願ばたきの湯立で、氏子中で病氣の平癒を祈り願をかけたり、その他で御立願をかける者があると、『奉御立願帳』といふ證文へ何々の神樣へ湯立を上げると書いて出す、神樣の數は一二ではない、多くの神名が記される。本人が願主、見舞人が願掛主となつて費用一圓と中折五帖を納める、昔は錢の外に中折五帖薪一負莚二枚草履二足火打二挺柄杓二本扇二本を納めたものである。
湯立の樣式は先湯の時と變りはない。
池大明神、鹿島大明神、津島大明神の湯
地震の難を免れた御禮の湯だとか、厄病平癒の御禮の湯だとかいふて何回もの場立が行はれる。
七石の湯　これも立願湯で、湯を立てる役は二人である、『奉御立願帳』は宮神樂の樣にこれも上げるが、費用は十錢である。
あげ湯　釜の湯を柄杓にくみ神々へ獻げる事である。
湯の花　先湯七立が終ると宮本の禰宜の家、金比羅樣、淺間樣、諏訪明神等へ釜の湯を柄杓に汲んで持つた水干を着けた人と、もう一人の小幣を持つた者とが行つて其祠前で、七浦や八浦の塩

をむすび上げて森潔まれと祝ひそめきよ、等の神樂歌を歌ひ、湯木の舞の如く舞つてその宮を潔め、湯を上げて來る。

又宮神樂のある時には、願主の家へ四人づゝ同じ樣に湯を持ち御幣を持つてその家を潔めに行く。之は宮世話人の指名により指定の家へ出向く事となるのであるが、家では酒肴を出して饗應する、此頃は時間も夜中の一時二時であり、湯の花に多く出てしまつて場内も一番淋しい。

七石の願の家へは二人づゝ遣される。

四ッ舞　烏帽子、水干、袴をはき紙緒の草履の四人、左手に扇、右手に鈴を持つて出る、1と32と4と向ひ合つてその位置で暫時舞ひ、後ちらしとなつて順次位置を移して爐のまはりを一週する、元の位置に來て扇を劍と替へて又前の如くに舞ふ。

囃子は笛と太鼓だけである、笛の調子は

2/4　3.32 | 1.23 | 5.32 | 10 | 35 | 53 | 2.32 | 10 |

といふ樣に聞える、至極簡單である、太鼓の拍子も單調である。

舞の手の名にはかなめ、すゝかけなどがある。

御一門　遠山土佐守一門に上げる湯であるといふ、禰宜二人が、塩、大根、火打をのせた膳を

持つて出て、莚に座して祓ひ、拜、印を結び、拜、火打で火を切り、拜、印を結んで五大尊を唱へる、始と終の時扇を擴げ其上でさら〳〵と鈴をふる。釜の西から北東終りに南即神座に對して正面へ來て、神の舞となる。次に湯木と鈴を持つて一とまはり、終りに湯木を二つに割つて湯を上げる此の時二人は口に白紙をくはへる。

神子　神前の疊の上に五六人の人が座り、太鼓を打ち鈴をふりながら聲を揃へて

エーまゐらするなソレきこしめすな　イヤー花の御神樂

といふ歌を唱へる、これは子供が病氣などの時、願をかけて、神の子となつて生涯その神に奉仕する、その御神樂である。

やをとめ　禰宜二人其他五六人が、これも神前の疊敷の上に立ち、持つてゐる小さい幣を上下しつゝ左足を一歩踏出し、右足をそれに揃へて踏みつけ、右足を退いて左足をそれにひきつけるそれを繰返へしつゝ

やをとめのやをとめのつとめてこそは　よがほげてつとめてこそは花のやをとめ

と歌ふ。最切は極めて靜であるが次第に荒くなつて、終の頃は跳ね上る形となる。終つて幣は神座に納める。

おくらびらき　禰宜二人が神座の御扉を開き、面箱を出して、一つ一つの面を『祓ひ給へ潔め給へ』と唱へながら嚴に調べる、此の時禰宜は白紙をくはへて居る。

きしめ上げ　きしめとは甘酒の事をいふ、宵祭りに造つて置いた物、これを深夜子ノ刻に神前へ供へる。

褌の舞　裝束舞とも言ふ。着物の上に左肩から赤い布をくゝつた太い褌を掛ける、頭には赤の鉢巻をし、袴ははかず、腰に大刀を帶んだ者、鈴と扇を持ち、初め一二の二人が出で、續いて三四が出で、四人となつて釜の圍りを一巡し、鈴と劍となつて一二と三四が互に組んだり入り替つたり、劍を持ち合ふて左廻りに廻つたり、一人立ち一人坐るといふ樣な所もあり、二人劍の下を潜る所もある、舞の手の名に、鈴かけ、かなめ、やまかけ、とびきり、腰かけ、輪潜り、等がある引つ込む時も二人づゝ引つ込む。

はぞろひ　一につるみの舞とも言ふ。八社の神の中一の宮には獻ぐる湯立がないので、此舞を上げるのだといふ。一人は裾模樣一人は黑の紋付である、赤い帶をしめて前に白紙二枚を折つて挾む、五方を踏んで一週し、二人手を腰にし、身體を重ねて右の扇を重ねて一つに持つて歩いたり、相手の扇を持ち合つて入れ交つたりなどする、見物はこれを見て『つるんだぞ、はなれたぞ』

と盛に囃す、之は男女であるといふ人もあるが、皆女だそうである。

鍬めの湯　役湯である。仕方は先湯、御一門の時と同じ、四方に坐して火を切り、扇と鈴で舞ひ、湯木を受けて舞ひ、湯木を割つて唱へ言をし、湯を上げる事に變りはないが、此湯立は天地のありとあらゆる物への供養の湯立で、極めて重い湯である。唱へ言も他の湯立に何々神社と言つたのが、此の湯では何々權現といふ風に變つて居る。

御座の神　日月の舞といつて十二人の者が鈴と扇を持つて舞ひつゝ一巡する。

（もと）　おん日月の今ぞまします

（うら）　大空へかすげの駒にたつたよりかけ

と、もと、うらで互に神かへしの歌を唱ふ、一週した時『御座の神』と言つて居るが、先に讀んだ『申上』を讀み上げる、斯くして先に遠くから集つてもらつた神々をおかへしする。そして此の後は內祭といつて、此の神社の神々、末社の神々のみの祭となるのだといふ、見物も『御歸りだソラ御歸りだ』と囃し立てる。

面　おもてと呼ぶ、面役の人々は丸裸となつて上村川の氷の流れる中に飛込んで來る、霜を置いた河原の石に足がじか〳〵と凍りつくといふ、裝束をつけて神前の階段の下に坐ると、禰宜が面

箱から面を出し、面の裏に白紙を當ててかぶせてやる。

イ　神太夫　爺姥の二面、爺は烏帽子水干を着、兩手に幣束を持ち、皆の歌ふ伊勢音頭につれて大平樂といふのを舞つて出て來る、姥は綿帽子をかぶり、そよもの枝を持つて出る、見物人は幣束などで鴨居柱などを打ちたゝき、わつと叫び聲を上げて之を迎へる、爺さんはコリヤ〳〵ヤートコの音頭につれて釜の圍りを踊つて行くが、姥さんはそよもの枝で群集の頭を打つて盛に暴れ廻る、踊り踊つて爺さんが中程過ぎ迄行くと群集の一人につかまへられて其所で問答が始まる、これを俗に『關所の問答』と言つて居るが、これは神太夫爺姥がお伊勢詣りに行く途中で關所へかゝり、その惡役人に錢や身の廻りの物迄一切とられてしまつたので、こんなつまらない馬鹿らしい目に會ふよりも、家に歸つた方がましだと、お伊勢詣りをやめて途中から姥さんと手をとり合つて一緒に歸るのだといふ。つまり釜の圍りを一巡せずして元來た方へ二人抱き合つて戻つてしまふ。爺を日天、姥を月天だと言ひ、又姥さんの群集を打つて廻るのをわだ雲を打ち拂ふ形だと說明して居る。

ロ　八社の神　(イ)源王大臣、政王大神、土佐守とその子であると說明してゐる。(ロ)兩八幡、先期の八幡及宇佐八幡、これを江戸家老國家老だと說明して居る。(ハ)二社の明神、住吉日吉、住吉

は老人、日吉は若い顏、土佐守の孫といふ。(ニ)淀の明神、一の宮、一の宮は女、一の宮は扇を擴げて靜に一巡するのみだが他の七神は袴をはき錦の袴を着け鈴と扇を持つて舞ひつゝ一巡する。

ハ　末社の神　(イ)稻荷、狐の面、赤シャツ、赤股引、赤足袋、赤烏帽子、赤手甲といふ姿で見物の中を飛んで廻る、此面は神社燒失後に新に加へたものといふ。(ロ)山の神　色赤黑く、眼が輝き鼻が高い、天狗を聯想するが如き面、羽衣と稱する毛を頭から後に垂れ右手に劍を持つて出る見物は『お出ましだ、それお出ましだ』と盛に囃し立てる、皆が聲を揃へて叫ぶ『ヨーイ〳〵ヨーイヤサ』の掛け聲で見物の中を散々に暴れ廻る。

ニ　四面　(イ)土王、水王が先づ出る、劍を佩き法印袴を着し、湯襷を以て兩袖をまくり上げ、釜に向ひ、印を結び、掌を湯の中に入れて手から腕を濡らし、次に左右に湯をはねかける、これがすむ迄は次の木王、火王を面箱より出さない。木王、火王も裝束は同じ、此二神は湯を使はず、見物の中を飛び廻る。四面とも猿田彦面だが、土王水王は口をつぐみ、木王火王は口を開いて居る。一方は湯を吹き冷し、一方は物に息をかけて温める形だといふ。

こゝで宮神樂のある場合は、其分として神太夫から四面迄を今一度繰り返す。

ホ　天伯　金王といふ、やはり猿田彦面で赤シャツ赤股引、赤足袋、赤手甲、赤色の切袴纏を

上に着て、紅白に卷いた弓矢を以て天地五方を射拂つて舞ひ納める。此役は神主が舞ふのを例とする、宮鎭あであるといふ。

金山の舞　扇を右に持ち、閉ぢたるまゝで左の掌を打つ、といふ樣な振りをして舞ふ。

神送り　俗にかす舞とも言ふ、湯を汲んだ柄杓の柄を小さい御幣でたゝきながら

『抑謹是東方の神には佛千代神千代部類眷屬なりとも一社も殘らず元の社の元の本宮へしつかと御送りとのづけ申さんと敬つて申す、東方の神は東方へましますやまたも御座れやこうみやうねんも神迎へして神榮へして、』と禰宜が唱へると一同、『神はゆけ〳〵守はとゞまれ此里のに』と唱和する。此の後に

あすびぬさ　といふ事が行はれる、禰宜二人が向ひ合つて居て、御幣十本を空へ投げては受け合ふ、其の時次の歌がある。

源王大神遊候まに夜はぼけて
つとめてこそは遊び歸らちや

（次に政王大臣、兩八幡、と順次本社末社の神十九社の名を先にして皆斯う言ふ）

客神は先にかへし、これは十九社の神がへしであらう。

お開きの御神酒　御直會、之を以て祭を終る。四ッ舞が夜中頃、御一門が三時頃、禰の舞が四時か五時、はぞろひが五時過ぎ、鎭目の湯御座の神がすんで、御面の出るのは七時頃、その頃が一番賑やかい、お開きは十一時か十二時頃となる。

十三日は勸定日、費用一切を精算して集金と支拂を行ふ、これは宮世話人の役である。

下栗の祭り

下栗の正八幡宮

下栗といふのは上町から東へ高い尾根を一つ越えた、遠山川の本流に面した、東向きの急傾斜の山腹にある一部落である。海拔一千米突の高地で、遠山川の雄大なアルプス的溪谷の奥には、聖岳、兎岳、上河內岳なの處女峯が、雪も溜らぬ荒肌をむき出して威丈け高に肩を並べて居る。その豪壯の景觀は日本アルプスの山村中恐らく他に比類なきものであらうと思はれる。

此谷に添ふて尙ほ奥深く通つて居る一筋道は、易老渡から光岳仁田岳の間を越えて、靜岡縣の田代へ通ずる山道であつて、今は一年の間にも登山者の幾人、山師や魚釣の人達が僅に通る位の淋しさであるが、昔此道を遠州側から越えて來た人々が、下栗よりも更に一里の川上である大野といふ所に住み着き、其所から分れて此の下栗を開拓したものだと傳へられて居る。遠山地方としても、谷間の部落よりもこうした尾根の上の方が開發が早かつたと言はれてゐるが、それが事實の歴史と一致するや否やは明らかでない。學校附近が部落の中心で、三四十戸が密集して居る、學校の下に井戸端といふ家があり、その家の横手に部落で最も多く使はれてゐる湧泉があるが此井戸は下栗の開發の爲にはかなり重大な役割をしたものであらうと想像される。今は下栗區といふものは大野その他を併せて百戸程の戸數があるといふ、全部が農作と養蠶とを業として居るが、耕地は非常に急傾斜である爲に水田は全く無く、全部麥畑である。

此所の冬祭りは、舊曆霜月の十二日に行はれる。詳しく言へば、十一日が宵祭、十二日から十三日へかけて本祭で、三日間に亘る祭典である。此所では此の祭の由來を、元和年間當時三千石を領して居た遠山樣は、非常に取立が嚴しく、二升の桝を以て一升とするといふ樣な惡政を行つた爲に、領内の百姓共の恨を買ひ、參勤交代の歸路、大河原峠に於て一揆の土民の爲に石打ちに

されて殺された。其頃遠山家の家老であつた米山、熊谷、胡桃澤の三人は百姓方の味方であつて一揆の時には自分等が弓の弦を切り、刀の目釘を抜いて置く故、其の時期は自分等に委せよとの打合せが出來て居たにも關らず、一揆の勢は土佐守を石こづめにすると同時に、和田城を襲ひ、土佐守の妻子一族はもとより、三人の家老も四天王と言はれた侍大將なども共に虐殺してしまつた。すると三年間飢饉が續き、惡病が流行し、それがなか〳〵熄まないので、百姓共はこれは必定主君遠山樣をはじめ罪なき人々迄殺した爲、その祟りが飢饉惡病となつて我々に報ひ來るのであらうと、遠山氏一族を八社の神として祀り、死靈祭をしたのがこの祭の起りであると言つてゐる。但し一揆の爲に殺されたのは遠山土佐守ではなくて、其の弟の新助景道で、元和八年四月七日であると云ふ（遠山氏史蹟による）何れにもせよ此の祭が死靈祭であるといふ說明は誰からも必ずきかされる事である。

祭に與る人　此所では禰宜の事を太夫といふ、三人あつて三人の太夫の中主席の人を宮本といふ、その下に下禰宜が五六人ある、此等の人々は着物の上に水干といふ白木綿の上衣を着、烏帽子を冠る、形は別段に變つた所はない、宮本の冠るものは他のものより丈高く、二引兩の紋がついて居る、袴をはき手には珠數を持つ。

祭事の庶務は區長が之に當る。帳元といつて、會計其他の事務をとり、祭の指圖を行ふ、他に各仕事の係員が定められる。

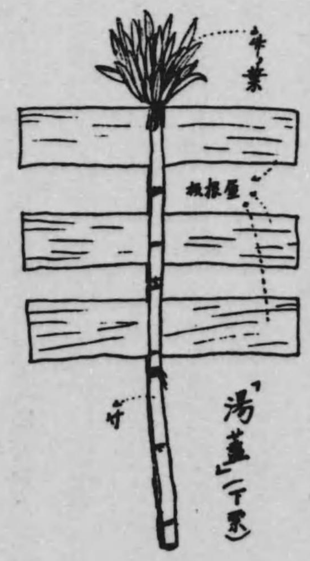
神社の構造　此祭の行はるゝ神社は正八幡宮と言はれ、學校と隣合つて居る。昔は今の學校の敷地にあつたが移轉したものだといふ。建物の大さ四間に七間半で、低い平屋造りの板葺である。其中が前宮、社殿、帳場、炊事場に分れてある、社殿の内神前に五祠を祀り、一祠に三社づゝ合祀して十五社を祀つてある、俗に十五社明神とも言ふ。

前宮　廣さ十八坪。板敷で中央に爐がある。爐には湯釜が二つ、神前に對して反對側、方角で言つて南の壁の高い所に日待棚といふ棚がある。

爐は上町の如く年々新に塗る事をせず、湯釜も鐵製の鼎の如き物の上にのせる。

社殿　は一段高く、其所へは莫蓙を敷く、神前との間には丸柱が四本ある。

帳場　社殿と前宮と兩方へかけて、一間だけ張り出して造られて居る、帳元が居て事務をとる所、



炊事場　神前の裏にある、おゝば(炊事場)と、しようじやとに分れて居る。おゝばは土間、しようじやは板敷、しようじやは多分精進屋と書くのだらうと思はれる。禰宜樣達の精進部屋である。

出入口は前宮に二ヶ所、炊事場に一ヶ所、壁は全部板壁である。

注連縄　前宮の周圍へ張る。かいだれは一階から五階迄のそれ〴〵異つた形のもの、又所々へ千道といふものをつける。この注連は式は一條だけれど、宮神樂といふ願ばたきのある時には一條を增して二條張る、神前の五祠の柱へも張る、神前と社殿との間の丸柱四本の内側の二本へも張り、又外側の二本からも張る。これも宮神樂の時には二條づゝ、鳥居、若宮等も同じく張る。

切抜　白紙に九條の切抜をしたもの、俗に格子といふ切抜を二枚重ねにして、入口の鴨居に四枚並べて貼る、尙他に湯のあてにも使用する。(其項參照)

湯のあて　上町の火さげに當るもの、四角な枠を梁からつるし、それに格子、鳥居、下り藤、橘、神酒錫、日月、等の切抜を二枚づゝ重ねて貼る。枠から十二階のたれ十六條が棟木の所に集り、そこに火の玉水の玉といふ二つの紙包がある。一番上に白紙を板に挾んだものが四本あるが、これを大天狗小天狗といふ。十六條のたれは十六天と言ひ、又は千道八橋十六天とも言ふ。

十一日　禰宜八人及係員二人此の日より神社の精進部屋に於て精進、祭に使用する湯木、祓木注連のかいだれ、御幣、切抜等を作る。

湯木　二種ある。たれの三階のものは普通の湯立に用ひ、五階のものは宮神樂の湯立の時に使用する。

祓木　木の串にたれをつけた湯木を小さくした樣なものであるが、形は湯木とは異つて居る。たれの形によつて舟底だの何だのと數種ある。社殿の兩側の柱の所につゝこをつるし、それに差して置き、御祓の時に所要の本數を抜いて持つて行く。

村民は薪を持つて集り、祭式萬端の準備を行ふ、又各戸より米を集めて甘酒を造る。

宵祭り

宵祭りの行事は

祓ひ

神おろし

よろこびの舞

御神樂

であるが、祓ひは神前正面に禰宜八人が坐して太鼓を打ち、鈴を振つてきよめの神樂歌を唱ふる事を言ふ。續いて神おろしの唱へ言がある。

よろこびの舞　は又四ッ舞とも言ふ、四人の舞である。（本祭りの同項參照）

御神樂　といふのは神前に坐して太鼓を打ち、鈴をふり手拍子を打つて、神樂歌を唱ふる事で歌は十五ある。

東山小松かきわけ　ヤンヤーハーハ
出づる月西へは入らで此所に招ずる　ヤンヤーハーハ
熊野山切目の王子梛の葉を飾りに持ちて那智へ參らす　ヤンヤーハーハ
伊勢の國天の岩戸を押し開き、神現れてげしやうなす　ヤンヤーハーハ
伊勢の國やうだの原をはむ鹿は角を並べて御座れ招ずる　ヤンヤーハーハ

諏訪の海水底照すこだま石手には取るとも袖は濡らさず　ヤンヤーハーハ
産土のえびらの鈴をもみならす祈は叶ふ智慧は増す　ヤンヤーハーハ
産土の黄金の御戸を押し開く神現れてげしようなす　ヤンヤーハーハ
産土へ參るは遠し參りては氏子よかれの祭こそする　ヤンヤーハーハ
産土へ參ればえさも絹なれば降りはだてゝ御座と招ずる　ヤンヤーハーハ
産土のごすいの鐘を打ち鳴らす阿吽の二字に會ふぞ嬉しき　ヤンヤーハーハ
面白と吹いたる笛に音聲してかんよと鳴けば秋の節　ヤンヤーハーハ
庭ならし誰を招ずる尾張なる熱田の森のいちを招ずる　ヤンヤーハーハ
庭ならし誰を招ずる信濃なる八幡の森のみこを招ずる　ヤンヤーハーハ

それが終ると引き續いて

立願ばたきの神樂　が行はれる、これも神前でその神樂歌を唱へる事である。（歌略す）

此の夜精進部屋に居籠つた禰宜樣は宵と眞夜中と朝の三回、日待棚の下で御神樂を上げる、これを御日待といふ。

本祭り

水迎へ　十二日先づ水迎への行事が行はれる。男女十歳前後の兩親ある子供、各二人づゝ計四人、宮神樂のある場合は各四人づゝ計八人が選ばれ、禰宜村民に連れられて谷に下り、河水を樽に汲んで持ち歸り、それを釜の湯の元にする、爐の火は山の木の瘤の中にあるいつちんといふ物へ火打で火をかけて點火する、それで焚きつける。

お祓ひ　宵祭りの時の祓ひと同樣であるが、きよめの神樂歌は

きんぜい　東方のまします道は　ヤンヤーハーハ　その道をきよめする
きんぜい　南方のまします道は　ヤンヤーハーハ　その道をきよめする
きんぜい　西方のまします道は　ヤンヤーハーハ　その道をきよめする
きんぜい　北方のまします道は　ヤンヤーハーハ　その道をきよめする
きんぜい　中央のまします道は　ヤンヤーハーハ　その道をきよめする

火を切りて水を生ずるたれかけて釜清まれと祝ひする

等である。それがすむと神前五祠（おたまや）の開扉、神酒を獻じ、中より御面裝束を取り出す

神名帳　爐と日待棚との向の所に莚を敷き、其上に机を据え、上に神名帳を置く、莚の四隅には小さな御幣を立つ、それと並べて太鼓を置き、それにも二本の小幣をさす、そして宮本を神座に對する正面に、禰宜衆其他參列者一同輪座して神酒を頂く。豆腐の汁一椀づゝ配られる。

それが引けると宮本が立ち上り、珠數をすりつゝ一と廻りし、机の上の神名帳を取上げて讀み上げる。初は歌の如き節廻しであるが、中途より普通の讀み上げとなり、太鼓を打ち鈴をふり、手拍子を打つて一同之に和する、詞章は上村のものと同一で、全國の一の宮の神名を呼び、此の祭りに招き寄せるのだといふ。

火寄せの神樂　その座でそのまゝ引き續いて行はれる、火寄せの神樂歌を唱ふ。

十二天の湯　神へ獻ぐる湯立であるといふ、十二回繰り返し行はる可きものであるが、今は省略して數回を以て終る。一番初の湯立の事を先湯といふ。

禰宜四人釜の四方に立ち、湯木を受けてそれを二つに割き、兩手に持つて舞ひながら釜を一周する、舞ひ方は上村と大體同じで、一と廻りして四人元の位置に歸ると

何々神の湯殿へ渡る　ヤンヤーハーハ　湯衣は綾か錦か

の歌になり、その位置で簡單な舞があり、後に

何々神が御湯召す時の　ヤンヤーハーハ　おみかげこそは雲と昇りて霞となる

といふ歌になるが、御湯召す時の迄を湯のもとと言ひて禰宜が唱へ、以下を湯のうらと言つて他の者一同が唱和する。二本の湯木を右手に集めて上下に二度空振りし、右足を一歩釜に近づけて湯木の元を釜の湯に突き込み、出した足を一寸踊る樣にどすんと引き込め乍ら湯をはぬ上る、湯を上げて神々に進ぜるのだと言つて居る。天照大神より始まり全國の有名な神々から次第に遠山地方の神々の名を一切呼び上げて來るのであるからなか〳〵の時間を要する。しかし湯のもとも湯のうらも前の文句を完全には唱へて居ないらしく『何々神の』『おんぼとのぼり』とそれだけづゝ云つて居る樣で『何々神の』で湯木を二回ふり『おんぼと』で湯の中に突込み『のぼり』で手元へ引き乍ら湯を上げる。湯立が終ると湯木の湯の滴りを左手に受け、兩手に持つて押頂き、日待棚の上へ納めて置く。

式の舞　四人の舞である爲に四ッ舞とも又よろこびの舞とも云はれる、袴を着けた舞人の一番目の人は右手に鈴左手に祓木を持ち、二三四番の人は右手に鈴左手に扇を持つて舞ふ、扇の持ち

方はつるし持ちと云つて骨をつまんで倒さに持つ、笛はヒーヒヤロロローローヒーヒヤロロ、ヒリヒヤロロローローヒリヒヤロロといふ調子で、太鼓は俗に五ッ拍子といつて、トントコトントン、トントコトントンを繰り返す。見物人は『ソラ舞つたりよーォ、舞つたりよ』と盛に囃し立てる。初めは四隅に立つて舞ふが、舞の中に一と二、三と四、と互に組んで舞ひ、位置を替へる事も行はれる。暫時して左廻りに四人が舞ひながら位置を移して元の位置迄一廻りする。この間は囃子の調子も急調となつて（この調子をちらしといふ）見物人は一層盛に『舞つたりよ舞つたりよ』とか『よう揃た〳〵』と囃し立てる。笛の調子に合はせて『おかゝに見せてやりたいが、おかゝはそこらに居らんかよ』などゝ云ふ者もある。

一廻りした所で左手の扇を納めて、二人は劍を二人は鞘を持つて舞ふ、或は組み或は離れするのを見物人は『ツルンダゾーハナレタゾー』と囃す。終りにちらしとなつて急がしく舞ひながら先の如く左廻りに一廻りする。此舞に要する時間は三十分くらいである。祓ひの始まるのが夕方で、神名帳、火寄せ、湯立をやつてこの舞の終るのは九時か十時頃となる。

湯花　初の湯立が濟むと、柄杓に釜の湯を汲んで持ち神前に立ち、他に鈴を持つた人、祓木を持つた人等三四人並んで

この宮をきよめるひじがあればこそみうらのお湯できよめする

と唱へながら、足を右向きに踏み替へて持ち物を左前下に振り、次にその反對に足を左向きに踏みかへて持ち物を右前下で振る。舞ひ終つて唱へ言、拜、柄杓の水を少し神前にこぼす。

これをお宮清めといふが、同じ樣に柄杓に湯を汲んで持つた禰宜に二三人附き添ふて、若宮井戸宮本の家等を清めに行く、そして神前で行ふと同樣の事を行つて歸る。

十二立の湯　他の立願湯、又は願湯といふのと同じ湯立である。立願に三種あつて其一番重いものを宮神樂と云ふ。之は願主の家で此の祭典に行ふありとあらゆる行事一切を行ふ所の願でなか〳〵の大願である。從つて宮神樂の願の二つ三つとある場合には、祭りも二回三回繰り返して行はねばならぬ事となり、非常に長い時間と費用とを要するため、今は省略して立願の家では行はず、若宮の前で行つて居る。禰宜その他數人の者が其の前に坐し、蠟燭に火をつけて神前に獻げ、一同拜をなして拍手、祓ひ給へ清め給へと唱へ、太鼓を打ち鈴を振つて長い唱へ言があり、後心經一卷を誦して終るのであるが、願主の家へは禰宜一人が代表して宮神樂の湯木と湯筒を持つて行き、其の家を祓ひ清め、禰の舞だけを舞つて歸る事となつて居る。

次を十二立といひ、これは祭典行事の中の湯立だけを十二立行ふといふ願であるが、今は之も

十二回は行はず省略してやつて居る、やり方は十二天の湯と變つた事はない。

も一つ神樂といひ、神前に於て御神樂を上げるだけの願である、この願ばたきの神樂は宵祭りの時に行つて居る。

神の子　順序は何の次と定つては居ないが、身體の弱いとか言ふ樣な者が一生を神の子にしてもらい、一代その神に奉仕するといふ願で、申し込んで來ると、湯木を持つて神座に向つて立たせ禰宜が手桶に汲んだ湯を笹の葉の束につけて其人にふりかけ

生れるも育つも人の子今とり上げて神の子となる

と唱へる。終つてから水干を着せ、他の者と一緒に舞つて湯立を行はせる。

水干の背に

○○年
正八幡大神
願主
十一月　何某

と書いてあるのは正八幡樣の子供となつた人が獻げた物であり、柄杓の裏に、奉納神の子何某と書いてあつたりするのは神の子の人達が獻げた物である。

初詣り　年内に生れた子供は美しく着飾つて、祖母や母親などに負ばれて初詣りに來る。菓子一斤と色紙を獻げる、色紙は神前の注連につるし、菓子は神前の五祠に供へ、禰宜が唱へ言をして祓木を持つて御祓をする、正八幡に供へたものは初詣りの者に下げてやり、殘りは子供達に配つてやる。初詣りの子供は入り替り幾人もやつて來る。

眷族の湯　眷族といふのは稲荷樣の狐、三峯樣の狼等の事だとも云ひ、又遠山氏一門の事だとも云ふ。

釜の兩方に莚を敷き、二人づゝ向ひ合つて坐り、湯木を受取つて脊に差し、拜をなし、四方じめの印を結び呪文、前獅子の印を結び呪文、拜、玉の印、拜、三封じの印、前獅子の印、拜、拜の時には何時でも珠數をする、之迄を行ひといふ。

側面に位置を替へ同じく行ひをなす、終つて元の位置に返り、湯木を左に鈴を右に持つて舞ふ。一廻りして湯木を二つに割く。此の時一の禰宜は湯蓋を取つて唱へ言をしながら發止と釜の湯を打つ。其の位置で先に書いた宮清めの時と同じ振りで舞ひ

東方の神々が双手に持ちて　ヤンヤーハーハ
拜むには東方の神々が受けて喜ぶ

南方西方北方の神々が云々と、湯立の神樂歌が唱へられ、湯木を一つに持つて湯上となる、『何々神の』『おんぼとのぼり』で湯をはね上げる事、すべて十二天の時と同一である。湯木は日待棚へ納める。

中祓ひ　參列者一同、と言つても午前の三四時頃で寒さは骨に徹する程だから、神社に來て居る者は少いが、釜の周圍に輪座して神酒を頂く。此の時帳元より祭典に關する諸種の報告が行はれる。

續いて太鼓を打ち鈴をふり手拍子を打ちつゝ

このめうじはこれ迄しようじしようめいなれば、このめうじは榮えましますはかの明神

と唱へ、六根清淨、心經一卷が讀まれる。

中祓ひは先に神名帳によつて諸國から集つて頂いた神々の神返へしで、これより後は客神の去つた後の內々だけの祭りとなるのだと說明して居る。

東方の神々が今よまします大空へかすげの駒にたづなよりかけ
南方の神々が今よまします七濱へかすげの駒にたづなよりかけ
西方の神々が今よまします大空へかすげの駒にたづなよりかけ
北方の神々が今よまします七濱へかすげの駒にたづなよりかけ
中央の神々が今よまします大空へかすげの駒にたづなよりかけ

と神返へしの神樂歌が上げられる。

鎭めの湯　大體に於て眷族の湯と同じであるが、之を行ふ四人の禰宜は三角形の紙マスクで口を覆ふて居る。初め 1 2 / 4 3 の位置で行ひをなし、次に 1 2 / 4 3 の位置で同じく行ひ、も一度最初の位置で行ひをなす。次に立つて舞ひながら一まはりし、湯木を二つにして兩手に持つて舞ひ、次に湯上げをすること、すべて眷族の湯と同じである。之は二ノ宮への湯立であるといふ。

湯上がすむと湯木を釜の上に十文字に交差して置く、之を以て湯立を終るといふしるしである。夜も白々と明けかゝる頃である。

褌の舞　赤い布で後鉢卷をし、所謂鬼褌をかけ袴をはいた人、八人の舞である。褌は赤いのも黑

いのもある。持ち物は右手に鈴、左手に扇、扇は親骨を摑んで平に持つ。

笛太鼓の調子も四ッ舞の時とは異り非常に悠長なものである。笛がヒヤーラヒーヒヤロヒーヒヤローロ、ヒーヒヤロヒーヒヤロヒーヒヤローロ、とやると太鼓も間を長くトーントントコトントコートン、トントコスツトコトントコートンとやる。從つて舞ひ振りも極めて緩かである。右の調子を眞似て群衆が『だーんご一つにとちみ一っつ』と囃す『團子一つに栃三つ』といふのは如何にも山村らしくて面白い。

左右の手を兩方に張つて一足靜に進んでは兩手を一寸下げる、丁度羽ばたきをする樣な形の舞方で一廻りし、二人づゝ組んで廻つたりするいろ〳〵の形があるが、次第に囃子が急調となつて來る。扇を刀と持ち替へて舞ふが、之も終の頃は急調となる。二人づゝ組んで刀を持ち合つて廻つたり、又その下を潜つたりする所もある。

面　御面の出る頃はもう次の日の朝となつてゐる。

此の社にはもとより四十餘の面があり、後に大野の四十餘面と合併した爲に今は八十餘面が藏されて居るといふ。しかし實際に出て來る面の數はそんなに多くは無い樣である。此所の最も古かつた面は、遠山川の奥の面の平といふ所にあつた木の瘤で造つた物であつたと云ふ。本祭りの

祓ひのすんだ時、扉を開いて中から出した面は、面箱のまゝ祠の屋根の上などへのせて置くといふ風で、面の取り扱ひはやゝぞんざいである。

御面の役も、上村では河水に浸つて來る樣な荒い行を經てゞなければやらないが、それに比べると此所では別に誰といつて面の役も定りは無い、火の王水の王、天伯といふ樣な重い役は禰宜が行ふが、他は願へば誰にでもやらせる。

御面の始まる頃は村中の老若男女悉くが集つて來るので、立錐の餘地もなくなり、盛に押し合ひ揉み合つて見物する。

イ　火の王　最初に此面が出る、大形の全體が黃土色の鼻高面、古色ある面である。神前から群集の中を押し分けて、手を腰に、左に向き、右に向き壯重な足どりで歩んで一の座に進み、印を結び呪文を唱へ、左右に三度釜の湯をはねかけて後、出る時の如くにして神前に歸る。

續いて今一つ中形の赤い色の鼻高面が出るが之も火の王樣で、同樣に湯を使つて元の所へ入る。

ロ　八社の神　遠山八社の神といふ、遠山氏一族八人の姿を寫した物だといふ。初に翁面、これは水干を着鈴と扇を持つて舞ひながら出て來る。續いて若黨の面、袴を着し矢張り鈴と扇を持つ。次も同じく若い顏の面、水干、持ち物前と同じ。も一つ同じ樣な面、袴、持物前と同じ。神

前より出て舞ひつゝ一廻りして神前へ戻る。又若い顔の面が四面續いて出て同じ樣に舞つて元へ戻る。

此八ッの面は皆小形で色は白い。

ハ 一の宮二の宮　五ッ紋のかけを着て扇で腹を押へて出る所は姙娠の態である。二の宮は赤い布で頭を包み、黑布を首に卷いて居る、此方は着物は綠色。

ニ 子安樣　綿帽子を被り、紙で折つた子供の形を抱いて出る。

ホ 汝大明神　女面、冠をかぶる、赤紙を抱いて出る。

ヘ 其他の女神面　が二面出る。女の神々は何れも靜に歩んで一廻りして元へ歸るのみである。

ト 天王樣　鈴と白紙を持つて舞ふ。

チ 赤なぎ明神　一寸しかめつたい顔の面、同じ樣に舞つて入る。

リ 若宮樣　シャッと股引の輕裝でニコ〳〵顔の御面が出て來る、皆で聲を揃へてヨーイ〳〵ヨーイヤサ、ヨーイ〳〵ヨーイヤサと掛聲をすると、走つて行つては群衆の中へ飛び込み又元の方へ飛び返す、盛に荒らび廻り、行きつ戻りつしながらも少しづゝ進んで、一週して神前へ入る。若宮樣から續いて二十餘の面が次から次と出て來ては荒び廻る、面は皆名があるが今は略す。

段々見物人も熱が出て來て祭はいよ〳〵高潮に達して來る。笛も太鼓も御面が始まると終り迄囃し續けであるが、これも次第に油が乘つて來るらしい。

ヌ 稻荷樣　狐面二つ。赤シャッに赤股引で鈴と扇で舞ふ。

ル 水の王　大形の綠青色の鼻高面、光澤無く古色ある面。も一つ群青色の鼻高面、之も水の王といふ。二つ正面に來り印を結び、左右に湯をはねる。

これがすむと見物人の誰彼迄も寄り合つて盛に湯をはねるが、此の時は盛り上がる程沸え返つて居る湯が少しも熱さを感じないといふ。

ヲ 秋葉樣　烏天狗の如き形の面。之も同じく湯を使ふ。

ワ 神太夫　爺さんと婆さんと各二人づゝ出て來る所が他とは變つて居る。婆さん二人は笹の束を持つて、やたらに人の頭を打つて廻るので、見物人は『小便婆さ、小便婆さ』と言つて之を罵る。婆さん達の荒びるのと、見物人の罵る聲とで場內は混亂と喧噪とで一杯になる。

爺さん達二人は湯木の串を兩手に持ち、見物人の歌ふ伊勢音頭に合はせて踊りながら、如何にも愉快そうに出て來る。皆が聲を揃へて歌ふのでなか〳〵の賑かさだ。コリヤ〳〵ヤートコセで破れる樣な騷ぎ。踊つて半廻り程行くと見物人に止められてしまふ。俗に關所の問答といふ所で

通らうとしても押し返されてどうしても通つて行く事が出來ない。そこで爺さん婆さんは元來た道を引き返さうといふ事になつて歸るのだが、此の時二人はしつかりと抱き合つてどん〳〵とび上りながら神前へ戻つて行く。

御面が出始まつてからこれ迄に二時間を要する。こゝで宮神樂のある場合は最初から繰り返して一通り行ふべき筈であるが、今はそれを略して、火王の面を面箱に入れて捧持し、釜の周圍を廻るだけの事にして居る。但し此の時にも他の人が湯を使ふ。

カ　宮天伯　二面。これも大形の赤い色の鼻高面で、劍を持つて舞ふ。他の一つは赤色の面で頭に眞白い毛のある物。此方は赤い水干を着る。同じく劍を持つて舞ふが、舞は他の面と同じである。御面はこの天伯を以て終る。

龍頭　龍と言へば龍の樣でもあり、獅子と見れば獅子とも見える。異樣のもので細工も素人らしい所が見える。これをかぶつて出ると、小さな子供がこれも素人製らしい板に目鼻を書いた樣な面を被つて、龍頭（たつがしら）と向ひ合て立ち、兩手に棒を持つて、その本をすり合せてはコツン〳〵と龍の頭をたゝく。そして後ずさりして行くと龍頭はそれを追つて舞ひながら前進、ぐるりと一と廻り廻つて終る。獅子頭と蠅追ひといつた形である。

かす舞　劍を持つて舞ひながら火のあての紙を切り落す、又劍を以て湯釜を打ち割る眞似をする。此時豆腐のかすを投げるのでかす舞といふのだと云つて居る。

木の根祭り　鳥居の傍に、今は腐朽して居るが昔は隨分大きかつたらうと思はれる木の株がある。此株の下へ赤い紙の御幣を立てゝ行ふ祭で、これは宮死靈、禰宜の死靈を祭るものだといふ。

反閇返し　莚の上に太鼓、神名帳、劍を置き、その周圍に並んで道具を拜む式である。又神前五祠に祀つてある十五社の神返しである。

とうぼうの神は行け〳〵又明年も神迎へは致しますが神送りはいたしません

といふ言を唱へる。

おんごの祭り　神前五祠の撤饌、閉扉。

これを以て祭を終る。これがすむのは以前は十三日の夕方であつたそうだが、今は次第に終了の時間も早くなつて午前中に終る。

和田の祭り

はしがき

村社和田明神の祭は十二月十三日に行はれる。祭式次第は別記の如くであるが、祭の骨子をなして居るものは湯立の行事と面舞とで、それは他所の祭も皆同じ事であるから、その現れた點に於て木澤や上町や下栗の祭と相違した點の主なるものゝみを擧げる事にする。しかし自分たちの實際に見學したのは後半の四ッ舞以後で、見學しない前半はもとより、四ッ舞以後も完全な調査は出來なかつたので、從つて記述も極めて大略であり、不備の点の多い事を豫め御斷りして置く。

祭り

遠山祭りの由來を說くのに、上村や木澤等に於て遠山樣の一族を殺した百姓等が、其後崇りを怖れて其の靈を遠山八社の神として祀り、死靈祭りをするのだと云つて居るのと異り、此の和田部落では現在の禰宜、村澤美賀氏の先祖に榊太夫といふ人があつて、其の人が承久元年に京都から此の神樂を傳へ、後に木澤や上村に傳へ、又滿島にも傳へたとの事で、和田に於て湯立の時にアンヤーハーハといふのは暗夜の意であり、木澤や上村方面のヤンヤーハーハは夜明けを意味し滿島に於ける神樂の行列は神參りの道行であり、三者を合して一つのものとなるのであるとの說であつた。しかし滿島の神樂といふのは獅子舞の事で、行列は獅子の先導する大名行列であるといふから、遠山の祭りとは趣が餘程違ふ樣である。或は滿島でなくして途中の御神樂であるかもしれない。

舞殿の構造にも少しく他所のと異つた点がある。

湯釜　は鐵の鼎の上に大きな鍋を置く。爐の四隅には八將軍といふ小さな御幣が立てられる。

湯の上の構造天井からつるされた四角な枠の四方に、日天月天の切拔（湯男といふ）ひいな（人型）八ッ橋、四手等をつるし、四隅から大千道四方から千道が中央に集つて天井に向つて居る。

湯蓋　は青竹を割り其内に板を挾んだ物である。

樂器　は太鼓だけで樂堂の中で打つ。調子は上村や下栗等と異る。

舞を舞ふ人の着る上衣は水干又は湯衣と呼ばれてゐる。

金湯　湯壺と云つて青竹の筒に釜の湯を入れたもの、一本十錢か二十錢位で帳場で頒けて居る。願

を掛る人は家に持つて歸つて頂く、病の全快した人や願望の叶つた人は願ばたきの神樂を上げる事になつて居る。昔武内宿禰が病氣の時、兄弟の神樣たちが湯の中に投げ入れて殺さうとした時に、宿禰は湯を伏せて湯に入り、却つて其れによつて病氣が全快したと云ふ故事に則つて行はれてゐるのがこの金湯であると云つて居る。此の說明は武内宿禰と甘美內宿禰の系圖爭ひに於ける探湯(くがたち)から出て居るのではないかと思はれる。

四ッ舞　一名祝儀の舞と言ふ。水干を着た四人の舞ひ手が拜殿の疊の上に神座を後に舞殿の方へ向つて坐ると、帳場から『祝儀』と書いた紙包を渡す。それを受取つた四人の舞ひ手は釜の四隅に立ち拍手、拜、刀を兩手に持つて頂き、腰に差し、左手で柄を握り右手に鈴を持つて足を五方に踏みつゝ一廻りし、元の位置に戻つて柄に九字を切つて刀を拔き左手に持ち、右手に鈴を持つて舞ふ。舞の手は上村下栗のものより複雜である。四廻りして終るが太鼓は始から終り迄打ち續けられる。四人の調子が揃つた時には見物人は『よう揃ふた〳〵』と囃し立てる。揃はぬ時にも『よう揃ふた〳〵』と冷かし半分に囃し立てる。

鎭めの湯　太夫脇の人々の他に見物人の誰彼も加はつて、湯木と鈴を持つて釜の圍りを一巡し、次に湯木を二つに割つて兩手に持ち一寸拜をなし、例の

何々神の御湯召す時のアンヤーハーハ
　おみかげこそは雲と昇りてかすみとなる

といふのを『おみかげこぐそこほんぼとのぼり』とやるのは此所も同じ事であるが、この時小禰宜が神名帳を持つて釜の周りに並んで居る人々に神の名を示し歩き、各自その與へられた神名を唱へつゝ湯を上げる、そして最後に一同揃つて舞ふ。

やをとめ　拜殿で水干の舞ひ手三人が神座に向つて立ち、左手で右袖を押へ、右手の指の間に白紙を挾んで前方に出し、左足を右足の先迄持つて行き、手を二三度振り、今度は右足を左足の先に持つて行き、同じく手を二三度振る。この所作を繰り返すのであるが、これには次の謠が歌はれる、歌ふのは禰宜である。

やをとめはならのやをとめ、なかさらそいてひめにゆうずらゆ、やらよろこびはよろこばし、
かくあらばたまのまいやをわれぞてらする、やらうれしきはうれしきは、むかしはそでにつゝみしがいまはたもとにあまりこそすれ、やらよろこびのよろこびの、なるたにがはをわたりして、いかにたいしやもうれしかるらん、うれしかるらん。

舞ひ手の指に挾んだ白紙は緣喜のよきものとして見物人が一早く奪ひ取つてしまふ。

これが終ると面をろしといつて御面の入つた箱が拜殿に持ち出される。此處の御面は四十ヶ程有るが、これは部落内にある小祠の神々であると云つて居る。つまり部落内の神々を一所に集めての祭りをするのであるといふ樣に說明して居る。

此面箱は八重河内村の梶谷、此田、和田の夜川瀨、和田明神、尾野島八幡、十原、大町と順に持ち廻されるので、之れ等の祭には皆同じ御面が出て舞ふのである。

いよ〳〵御面が出るといふと見物が一時にざわめくのは何所も同じ事である。禰宜が御幣を持ち一の隅で祓ひをし拜をなし、唱へ言、御幣を置いて袖の中で印を結ぶ。次に二三四の隅で同じ事を繰返して行ひ。一の隅に戻つて又同じ事をして釜に向ひじつと呪文を唱へて居ると、ぐら〳〵と煮えくり返つて居る湯は次第に靜まつて來る。面箱の所には御面の世話をする人が二人箱の兩側に坐り、白紙を口に啣へた小禰宜の顏にお面を被せてやる。御面の世話をする人は禮服で白いマスクを口に當てゝ居て、御面の出し入れをする。小禰宜が被せてもらつて一番先に出る御面は水の王で青い色の鼻の高い面である、先づ一の隅に行き、腰に手を上げて一進一退の足踏で一廻りし、一の隅に戻つて袖の中で印を結び、拍手、外でも印を結び、次に二に行き同じく三も四も同じ事を行ひ、一の隅に來り右腕をまくつて左の手でその袂を押へ、右方から左方へ一二三と三

度鮮かに湯をはねる。次に二三四と同じ樣に右から左へ湯をはねて一の隅に戻り、先の樣に手を腰にして足踏しながら一周して面箱の所へ戻る。

續いて火の王といふ赤い鼻高の御面が出るが、これから後は面を被つて出て手を腰にして力足を踏みながら釜のまはりを一と巡りして引き込むだけで、面を被る人も定つては居らず、誰彼となく志願して被せてもらふ。別に舞が有る譯ではないから、たゞ面箱の所へ行き御面を被せてもらひ、釜の周を一巡して引き込み、面箱の前へ行つて御面をとつてもらふ。面の扱ひ方は上町程の嚴格さはない。火の王が出ると湯は又ぐら〳〵と沸き返つて來る。この事は村の人達は非常に神秘なものとして居る。

水の王、火の王の次に諏訪明神、正八幡、伊豆權現、大野田神社、愛宕樣、關の御神、大山住神半僧坊、金比羅樣、みだ八幡樣、若宮樣、關の御方、三條神社、大がみ神社、關の明神、遠山土佐守、水天宮、大宮姫の命、天滿宮、湯ノ權現、磐長姫の命、城神社、山の神、稻荷樣、若黨（六面）天姫女命、猿田彦命等引續いて出るが、同じ名の面で二面あるものもある。古色を帶んだもの、比較的新しく見えるもの、素彫のまゝのものなど種々である。

次に猿樂がある。御面は猿面、赤シャツに赤股引で左右の手に扇を持ち、拜殿の疊の上で舞ふ。

こゝはもとよりいせのくにでのとりゐる、すがたしようじのみち、またはくるまにうちのりて、わかうがかたへといでにけり

と禰宜が謠ふと、一方の膝を折り一方を前へ出すといふ樣な簡單な踊を繰り返へす、謠が終ると釜の所へ出て來て同じ樣に隅々で踊つて行く。隅から隅へ移る時には飛ぶ樣にして行く。一廻りして拜殿へ戻り、又次の謠につれて踊る。

やァらやァらうれしやありがたや、君もろともにわれらまで、ごしやくのがたへと入りにけり

御面の最後に神太夫といふのが出る。面は爺媼ともに古色あるもの、爺さんは水干、媼さんは派手な長襦袢で二人揃つて出て來るが、見物人は『それ神太夫爺媼だ』と云つてわつと騒ぎ立てる釜の周を一と廻りしない中に見物人につかまへられて押問答が始まる。爺さんとの問答役は禰宜さんがやつて居る。媼さんは笹の束でやたらに見物人を打つて廻る。見物人は『小便ばゞァ小便ばゞァ』と悪口を言ふ。媼さんがしきりに早く來い〳〵と爺さんを招くけれど、爺さんは關所にかゝつて居てなか〳〵問答が六ヶ敷く、容易に埒があかないので、馬鹿〳〵しいから引き返さうととう〳〵もと來た道を歸るのであるが、此の時二人は抱き合つて中へ入る。

これで御面が終り、次は

かす舞である。袴をはいた人が盆の上に大根を四角に切つた物と豆腐のかすを載せた物を持ち、釜の周りを一と廻り舞ひ、終いて隅々で足を前へ獻上る樣にしつゝ手を上下に打ちふる、次に神かへし、禰宜が一の隅で御幣を持つて唱へ言をする。その一くぎり一くぎりの合ひ間に、禰宜に相對してゐる二人の者が腰をかゞめて互に入れ替る變つた動作が有る。

ひいなおろし、劍の舞　舞ひながら釜の上の枠につるしたひいなや湯男や四手を切り落とす儀式である。終つて最後に一の隅にあら菰を置き、左右左と三足力强く其上を踏みつける。

以上を以て祭を終る。此所の祭は御面が手間どれない爲か終りの時間も他所よりは早く、午前四時頃に終る。

釜の隅へ一の隅二の隅といふ名をつけたのは記述の都合からで、實際に和田でそう云つて居る譯ではない。

尙ほ一見した所、舞の手ぶりは細かく、猿樂、やをとめ等も特異の点があり、御面の出る樣などにも他とは異つた所が目につく。和田へ行くと、もう祭をやつしてしまつて見る影もない、といふ事をきかされるが、決してそんなものではない。何所の祭がよくて何所の祭がへぼいと言ふ事など言へるべき事ではなく、又そう言ふ事を本氣にきくべき必要もない。それ〳〵の所

に共通があり特異があるのを見るべきである。

霜月祭りの日取

所在地	日りの祭取	社號（俗稱）
八重河内村、梶谷	十二月一日	
〃　此田	十二月三日	
木澤村、八日市場	〃　八日	日月様
南和田村、十原	〃　八日	城神社
木澤村、木澤	〃　十日	正八幡社
和田村、夜川瀬	〃　十日	
上村、上町	〃　十一日	正八幡社
上村、中郷	〃　十二日	八幡社
木澤村、上島	〃　十二日	白山大神
和田村、和田	〃　十三日	諏訪明神

木澤村、小道木	〃　十四日	御熊野
上村、程野	〃　十四日	正八幡社
八重河内村、尾野島	〃　十五日	正八幡社
木澤村、須澤	〃　十六日	雨天伯様
南和田村、大町	〃　十六日	
上村、下栗	（舊暦十一月十二日）	正八幡宮
……以下湯立なし……		
木澤村、河井		おだい明神
木澤村、中根	十一月十二日	根の上神社

霜月祭りの次第

木澤	お潔め 神名帳 十六の神樂 玉の御神樂 五大尊 湯木の舞 先湯 太夫舞 やをとめ 宮潔め 四ッ舞 御立願の湯 四ッ舞 天伯の湯
上村	座揃へ 大宮潔め しめ引き 神帳 申上げ 先湯 神之舞 宮神樂の湯 池大明神の湯 鹿島大明神の湯 津島大明神之湯 七石の湯 あげ湯 湯の花
下栗	水迎へ お祓 神名帳 火よせの神樂 十二天の湯 式の舞 湯花 十二立の湯 神の子 眷族の湯 中祓ひ 鎭めの湯 褌の舞 面
和田	湯の式 扇の舞 湯開き 一之湯 扇剣の舞 二之湯 願ばたきの神樂 神子 金湯 四ッ舞 鎭めの湯 やをとめ 面 かす舞

	褌の舞 中ばらひ 神かへし 鎭めの湯 面 釜割り かす舞 木の根祭
	四ッ舞 御一門 神子 やをとめ おくら開き きしめ上げ 褌の舞 はぞろひ 鎭めの湯 御座の神 面 金山の舞 神送り あすびぬさ
	龍頭 かす舞 木の根祭 反閉返し おんごの祭り
	神返し ひいなおろし 剣の舞

坂部の冬祭り

はしがき

下伊那郡南部の山間の村には、遠山の霜月祭りや新野の雪祭りなどの如く、特異な祭りが行はれてゐる、次ぎに述べようとする坂部の冬祭りも之れ等と形式を同じうするものがある樣である。坂部は交通上隨分不便な土地である、山村の事で、又民情なども至極純情な美しさがあり且つ眞面目さがある、かうした昔ながらの矢釜しい古例式の祭が保存され傳へられてゐることも眞に故のない事ではないと思ふ。

此の祭りは大別して湯立と面形との二大事と伺はれる、神社と森の崇厳、祭器等にも古色蒼然たるものがあり、舞も之が神樂といふものであらう、誠心を神に捧げるといふ氣持ちが現はれてゐて、眞に有難いものである。

坂部は滿島の南方凡そ三里、大森山によつて三州富山村と背中合せをして東北へ面した急傾斜

の村落であつて、東南は天龍川の峽谷に迫り、平岡村の山々が對岸に聳えて居る。部落の東を西北より東南へ向つて天龍川へ注ぐ虫川の溪谷がある。清冽なる虫川の流が天龍川に落ち合つて居る所で、平岡村の山から伐り出される檜の材木を筏に組んで居る。此の虫川の上流に日向と云ふ部落が見えるが、そこから地藏峠を越えて向方より新野方面へ出ることが出來る。

諏訪神社

坂部本部落から五町許り上つた所、大森山の中腹に大きな森があつて此處に村社諏訪大明神が祀られ、此の神社で例の徹夜の御湯立の祭りが行はれるのである。御本體は菩賢尊で、諏訪の本地なるに依て諏訪大明神と號し奉る。此の社の由緒については關傳記にもある樣に、南北朝の文和二年坂部の開祖である熊谷丹甲貞直が土着の際、此の地に先住してゐた老女の安置してゐた本尊の菩賢尊を偃號し奉つたものである。現存の棟札によつて見ればそれより六年の後、其の子熊谷小丹治平直常が北朝の延文四年己亥九月十九日卽ち南朝の正平十四年に建立した樣である。更に明德四癸酉年十一月修造してゐる。直常は又三月酉之日を祭禮と定め、八ッ的之式を以てしたと云ふ事が關傳記に記されてゐる。

本社の向つて右下段に若宮八王子を祀つてある。其の由緒として傳ふる所によれば、永享三年八月の事、藤原豐若丸と云ふ十二三歳の稚子が、世にも珍らしい南京茶椀を持つて落ちて來た、そして村の者たちに追ひかけられて、今の若殿の瀧に身を投げて死んだ。其の後人々は之を若宮八王子として崇め一宇を建立し、永享十一年本社の傍へ遷宮したのが之である。

更に本社と關係の深いのは本部落の中央にある火王水王の社で、祭に行はれる面形(めんぎやう)はこの社に祀られてある。面形の由來を尋ねるに、昔伊吹藤内と云ふ者、北平といふ所で門弟共を集めて猿樂を興行した、其の白髭面が後彩色されて火の王と崇められ、能に用ひた鞁の胴大小二つと共に保存されるて、明神の祭禮には能を行つてゐた。其の後新に火の王水の王の面を彫刻し、北平より迎へたのは隱居火の王と號して今は使はない樣になつて居る。

この諏訪社の祭禮は年内に五度行はれた、正月、三月、六月、九月、霜月であつたのが、現在では舊來の霜月祭を一月に行ふ樣になつた。三月と十一月の祈年祭には神主が臨んで祭禮を司る國家の大事とか村内の大事とか疫病の流行するとか云ふ時には臨時祭が行はれる。それには特別の儀式と神樂があるさうである。

次に齋田とお宮百姓について述べて見たい。神社の森の周圍一圓の畑は神社の財產であつて、

森の北側に四十坪許りの齋田がある。森の近くに森下といふ家と柿の平に船田氏といふ家があつて、お宮百姓をつとめて齋田を耕作してゐる、勿論齋田は清淨にして普通の肥料を入れない、祭に行はれる庭の大火の灰を集めて肥料とし、水は懸樋にて川上より引いて來てある、齋田で取れた米は神事に用ひ、其の藁で注連繩や菰等を作る、お宮百姓の家ではお宮の水汲み、粉搗き、宮掃除等一切を勤めてゐる。

祭場

諏訪社本殿の前が拜殿、拜殿の前が舞堂になつてゐて、舞堂は間口四間奥行二間あり、向つて右に湯釜の爐、左に普通の爐が切つてある、舞堂と相對して籠堂と水事所がある、きさはしを上つた正面に青年の事務所が設けられてあつて、庭の中央には大火を焚く準備が出來てゐる。

忌

忌と云ふ事が嚴しく行はれてゐて隨分強く人々の心持ちを支配してゐる、これは誠心神に仕へる信心の發露として最も貴い事であると思ふ。主なる忌を擧げて見れば、或部落の中で、祭前七

日の中に若し不幸があつた場合には、其の部落だけは全部穢がかゝつて祭に出られない、妻が姙娠してゐる場合には其の夫は面形には出られない、祭前三日間に不淨のもの(肥し)等を汲み出すことは出來ない事になつてゐる、其の他行事の一々について清淨潔白の精神が現はれてゐる事は驚くばかりである。

祭に關する言葉の說明

神子 祭に直接關與する者を神子といふ。これは子供が病氣に罹つたり、何か不運に遭遇した際祈願を立てゝ產土神の子として育てゝ貰ふ、それで不運の家には一戶に神子が二人も三人もある譯である。十三歲の十月十七日(昔は九月十九日であつた)に神酒一升を買ひ、裝束(水干樣の上着)をこしらへて神子になる生れかはりの式を擧げ、禰宜について舞を上げる、女の子は舞へないから代理の人に舞つて貰ふ、神子になつた者は一夜不眠で神仕へをする。以來神子は直接祭の任に當り、神社に勤めて終身湯立の神事と神樂の舞をするのである。

氏子 村民全部が氏子であつて其の中に神子がある譯である、氏子は祭には主に御飯場の任に當り接待の役を勤める。

湯釜 舞堂の中に爐が切つてあつて三本脚の大きな五德の上に大きな釜が懸けてあり、湯釜の上の天井にはかいだれがつけてある、舞堂の外には大きな桶が据えつけてあつて湯立に使ふ淸い水が一ぱい入つてゐる。氏子は各戶二荷づゝの薪を上げる。

湯だぶさ 祭の前日笹を切つて來てお祓をして湯だぶさを作る、きり草の大事といふ事が行はれる。湯だぶさは湯立の時、湯をかきまはすに使ふもので、お祓をした笹を適當に束ねて作られる。

祭の次第

此の祭を拜觀した順序に依つて述べて見たいと思ふ。

先づ水行(こりかけ)の大事と云ふ事が行はれる。之は祭の當日夜明けといふ頃に、神子は四五町程離れた天龍川へ下つて行つて、淸らかな水を桶に汲んで持ち歸り、此の水で家內中の者の體を淨め(水行)て祭事に取りかゝるのである。これに唱へ言葉がある。

昔よりあかの衣を脫ぎ捨てゝこり取る時は我身こそ淸まる
奧山のいつそう川をかき流し汲みとりてかたにかけると我身こそ淸まる

昔よりあかの衣を脱ぎすてゝ今着るこそは清じのかたびら

次に神門（鳥居ちごり）の大事がある、之は鳥居へ注連を張る式である。唱へ言に、

天笠の天の川原の水たへてちり〳〵いつんでむすんでかたにかけたれば我身こそ清まる

千早振神の鳥居をくゞるには萬の罪をきりやかすみとゝけて通る

續いて注連の大事、鰐口の大事、玉床の大事が行はれ、それ〴〵唱へ言がある。

天照す日の光は神川原引くしめ縄はうちそとはないあんあびらおんけんすはか

とう〳〵と打ち鳴らす鐘のごすいに夢さめてあうんの二首を聞くぞうれしや

たまゆかへあがりて神の心を見る時は神の心はゑきようします

以上は大體晝間の中に行はれて、之から宵の祭に入るのである。

八ッ目の鈴

釜洗ひの行事　釜の中へ水を少し入れ、神子が三人周りに立つて歌ぐらを歌ひながら、八つ目の鈴を手に持つて振りながら足どりをして舞ふ、此の中の一人が藁を三筋持つて來て、それで釜の中をかきまはす、それ以後は此の火で足をあぶつたり煙草を吸つたりしてはいけない事になる。

この式が行はれてゐる中に、一方下の部落の火王水王樣の社より御神輿迎へをする。先づ火王

水王樣の社で禰宜の御祓式があつて、御神輿を迎へる。其の行列は禰宜が先に立つて露拂ひ、その後を四人の十五六歳の若者が御神輿を擔ぎ、御神輿の周には四つの提灯がともされる、裝束は何れも上着（水干樣のもの）と袴を着用する、大太鼓の後を十人の小太鼓、其の後へ鎗薙刀とりひげを持つた者六人が續く。

此等は禪鉢卷袴着用の若者で、五町餘りの坂道を渡り拍子で囃し立てながら練り上げて來るので、境内へ入るのを宿入りと云ひ、大名行列が宿驛へ入つた意の行事で、行列は圓陣を作つて伊勢音頭が初まる。其の中へ顔人踊りと云つて長いとりひげを持つた男（親爺）が踊り出る、其後から頰冠りをした男（女

の事）が出て向ひ合つて踊る。

この時、日はとつぷり暮れ、庭の大火がばち〳〵と燃え上つて四方を眞赤に照らす、此の大火は翌朝までどん〳〵燃え續けるのである。舞堂の前には赤い提灯がともされる。

願人踊りが三回行はれると、御神輿は本社へ遷されて宮遷の祝詞を奏上する。此の間に境内の一段高い所で天狗祭りが行はれる。禰宜が膳の上へお供へ餅を四つ置いて、之を捧げ持つて唱へ言をしながら、五方を拜む。其の唱へ言は、

○東方に十萬九千九百九十九人の海天狗、十二天狗、川天狗、十二天狗、道天狗、十二天狗、辻天狗、向ふの天狗、十二天狗、屋根天狗、十二天狗、座の天狗、十二天狗、宮天狗、八天狗と祭つて本地へかへさば、天伯すわかやらきりすわか、うんきよにからきにからきに、うつて本地へかへす

○南方九萬九千九百九十九人の云々、前文に同じ

○西方八萬九千九百九十九人の云々、同

○北方七萬九千九百九十九人の云々、同

○中央六萬九千九百九十九人の云々、同

天狗祭の大事が濟むと、愈々祭式が始まる。此の式は普通村社で行はれる式と同じ次第であるが、たゞ修祓の次に水清めの祓がある事が變つてゐる。凡そ一時間かゝつて式が濟み、其の場で座固めの大事が續いて行はれる。唱へ言に、

大事々々不動明王寅卯辰巳が、からもく天。丑寅が多門天、戌亥が持國天、東方ひしけん、南方ひしけん、西方ひしけん、北方ひしけん、中央ひしけん、ひしけんひしけんひしまいたしやそはか

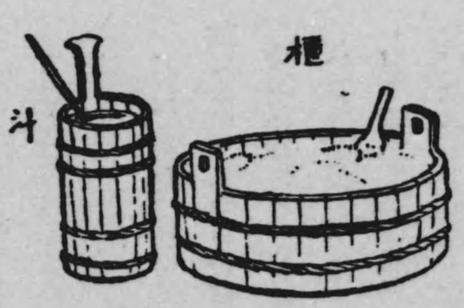
之にて濟む。續いて注連引の大事、神下しの大事が初まる。神子一同が揃つて、三つ拍子の太鼓に合せて八つ目の鈴を振りながら歌ぐらを奏する。次に御供渡しの大事がある。

唯今み御供をとゞめおんらんと火をゑらみ、水をたゞいてきこしめせ、みすそ川の清きさんばいなり

引き續いて順の舞が行はれる、神子四人が左手に扇、右手に鈴を持つて出て笛太鼓の調子に合せて舞ふのである。此の舞は神子四人づゝ交代に出て全部が舞ふ譯であるが、實際は之を略して回數を少くして舞ふ。

順の舞が濟むと拜殿から舞堂へかけて大庭酒の大宴が開かれる、長い机をコの字なりに並べて

神官禰宜來賓學校聯員名譽職はじめ、神子氏子一堂に會して神酒の宴が始まる、湯釜の火は盛んに燃え上つて人々の顔を赤く染めてゐる。次に御飯が出る、其の器物が頗る古物であつて、大庭酒始つてのものである、此の大庭酒は前に云つた今から凡そ五百七八十年程前、諏訪社創建の時から始まつたものと云はれてゐるから、木椀の如きもすつかり塗りは剝げてしまひ、緣も大方缺け損じてゐる、之に土地製の竹の割箸がつくのも珍らしい。角取手の附いた飯櫃へ一ぱい御飯が盛られ、汁も深い器の取手の附いた桶であつて柄杓が入つてゐる、之れ等を座中引づり廻して饗應されるのであつて、實に太古の饗宴もかく許りと思はれて神々しく有難いものである、普通此の饗應は隨分强いるそうである。『飯を喰ふか喰はんか、こら飯を喰へこれでもか』と云つて松明を突き附けるそうであるが、今年の饗應は珍客が居たためこの事が無かつたのだとの話であつた。



之が濟んで、湯祓の行事と云つて、禰宜が湯釜の前へ饌米を供へ、唱へ言を奏して釜へ注連を張る式がある。

次に申上げの歌ぐらがある。神子一同同神前に向つて坐し、鈴を振りながら太鼓の調子に合せて申上げを奏する。この申上げといふのは大正十年に改正されてゐるが仲々長い詞である。その大意は、

『今日の吉日の祭に當つて謹上再拜敬而申上げ奉る。日本六十六ヶ國の中伊賀良の庄關郷坂部の大神に、怒を柔らげ四方の衆生を堅固に守り守護せしめらる樣今日玆に白釜を黑釜と磨き立て黑釜をば白釜と磨き立、清めの御湯を差上參らする。爲に八つ目の鈴を振り鳴らし神の傳へで舞をしてあそぶ』

といふ意味の詞を長々と申上げるのである。

これが終ると御湯立が初まる。關傳記に據れば『正長元年八月夢想に依て神樂始まる』となつてゐる。御湯立は諸々の神へ奉るので、一回を一口と言ひ八回卽ち八口立てる、御湯一口について舞が四回、卽ち上着の舞、やちごの舞、刀の舞、刀拔身の舞の四立がある。

最初立てるのが大神宮の御湯であつて上着の舞から初まる。神子四人が各一枚の上着を持ち、これを兩手に擴げて振りながら、笛太鼓の調子三つ拍子に合はせて二人づゝ向ひ合ひ三々九度に舞ふのである。三度舞ふ度に湯釜に向つて舞ひ、次の舞の構へに移る。更に湯釜の周を右手の

方へ舞ひながら廻つて行き、最後に又湯釜の左右へ二人づゝ分れて舞ふのである。これを一と立といふ。

やちご

（巾二寸四分　長サ二尺八寸四分　槍

次はやちごの舞で、神子四人がやちごを持つて出る。初めやちごを湯釜の上へ十文字に組んで置き、鈴を振つて舞ひ、次にやちごを左手に執つて足どりをしながら舞ふ、舞の順序は上着の舞と同じである。

次は刀の舞　刀を鞘のまゝ左手にて柄を持ち、右手には鈴を持つて舞ふ、順序は同じで、調子は三つ拍子である。

最後は刀抜身の舞といつて、鞘を拂つたまゝ抜身で舞ふのである。やはり三つ拍子で順序は同じである。

以上の四立が濟むと大神宮の御湯一口を立てる、先づ禰宜が左手に御幣右手に湯だぶさを持つて出る、禰宜と同じ装束にて左手に扇、右手に鈴を持つた神子が左右に立ち、三人並んで湯釜に向つて五方を拜して舞ふ、其の中に神子の人數が加はつて湯釜の周を歌ひながら舞ふ、中の一人は松明

湯だぶさ

を掲げて湯を照らす、その歌ぐらを記して見る。

一　式なれば式程申す幾度も〳〵御召聞召し玉へ御神。
一　秋過ぎて冬の初は今日かとよ〳〵風ものどかに八重に櫻。
一　峰は雪麓は時雨里は雨〳〵雨にましたる霰なるらん。
一　冬くれば渡る瀬毎にこほりばし〳〵かねのくれはしかけや渡る。
一　群雀育ちは何國伊勢の國〳〵梅の梢で育ちなるらん。
一　宮川を皆連れ登る鮎の子は〳〵鼻を揃へて御座と參る。
一　千早振る天の岩戸を押し開き〳〵神現はれてげきゆふ召さる。
一　伊勢の國參れば遠しきぬなれば〳〵折てたゝみて近く參る。
一　伊勢の國杉の叢立ち多ければ〳〵色ある杉がさしでなるらん。
一　伊勢の國高天原の八重つゝじ〳〵花の盛りで今日程目出度い。
一　伊勢國高天原に立つ煙〳〵ひはらごしきのにほひなるらむ。
一　熊野路のきりてが森のなぎの葉を〳〵あらしにかけてかけやわたる。
一　熊野路の音無し川のよどの瀬を〳〵にごめて立つはかもやおしどり

一　愛宕山おろす嵐が舞なれば〳〵暮ます宵がひきしなるらん。
一　ところではところの神がおしはする〳〵神にかだされひめぐりの川。
一　大社が森であなた此方と呼ぶ聲は〳〵大社が呼ぶか森で招くか。
一　天照大御神のをりゐの御座に今日程よきは綾を經て〳〵錦を着て御座と參る。
一　天照大神の湯殿へ下りし湯衣は〳〵竪が七尺袖が六尺。
一　湯の父に湯殿は何處とさし下る〳〵下こそ湯殿よ中は舞堂。
一　かき立てるしでのはごとに下る神〳〵神現はれて御新召さる。
『伊勢は天照大御神豐受大神をりゐて花の王ののみどく』
一　湯召す時の見るかげは〳〵湯元で見えるかすみとぞなる。
『伊勢は天照大御神内宮は八十末社外宮は四十末社朝熊の山にもろ〳〵御神』
『天の岩戸月日の御神霧の御神、鳴る神樣や星の御神みるめの御神祇殿の御神、いちみこ御神、萬御神』
一　湯召す時の見るかげは〳〵湯元で見えるかすみとぞなる。
『大神依ては八萬八千の天津御神九萬八千の國津御神、高きは大神、低きは小神、諸々御神』
一　湯召す時の見るかげは〳〵湯元で見えるかすみとぞなる。

一　神々の湯召す時の見るかげは〳〵湯元が見えるかすみとぞなる。
『あら湯をば森こそ鎭めるあら湯をば夜中の清水をこほりとる』此歌二度唱ふ。
一　天照大御神の遊びするまに夜がほげる夜かほげて明けてつとめてどこに御座る。
一　何れもわけて參らする〳〵御召開召給へ御神。
一　まち〳〵て御湯は今宵さ夜中に〳〵月待ちゐたる今宵なるらん。
一　庭ゆに七つ釜立て沸す湯は〳〵それさへ參れば今日程目出度。
一　うれしげに何をかとらせ花衣〳〵高天原をゆたりしやらり。
一　天照大御神を舞上げるとの千早振〳〵どこにとゞまる神は來所。

以上の樣な歌ぐらを奏しながら、湯の周りをしづかに足どりをして廻るのである、その中に禰宜は湯だぶさで湯をかきまはして四方へ振りかけながら、釜の周りを廻る、舞終つて一同は神前へ出て更に舞ひ、拍手にて終る。舞も湯立の歌ぐらも長いから御湯立一口に凡そ一時間はかゝる。

次は火の大神の御湯である。御湯一口につき舞四立は前と同じであつて、たゞ太鼓の拍子が早くなるのみで、ばちの數は同じく三つ拍子である、之にも歌ぐらがあるが、歌の形式は略同じ樣である。

續いて大神の神樂、天白神樂、護王の御湯といふのがある。御湯一口について舞四立、何れも前と同じである。

次に行はれる津島神社の御湯は願ばたきの御湯て、前と同じく舞四立があり、次が御湯立である。禰宜が左手に御幣、右手に湯だぶさを持ち、湯釜の前に坐して祝詞を上げる。湯だぶさが八人、御幣が十四人（各自左手に大幣右手に小幣を持つ）松明が一人、これにも歌ぐらがあつて、歌ひながら湯釜の周を舞ひながら廻る。禰宜は釜の側に居て、右手の湯だぶさで湯をかきまはす、と、湯だぶさを持つた一人が水の入つた瓶を持ち、時々釜の中へ注ぎ込んで增し湯を差し上げる、禰宜は盛んに湯玉をとつて皆の者に振りかける、津島樣は風の神と言はれてゐて、風を引いた人は治る樣に祈願を立てる。その願をはたくために御幣を持つて此の舞に加はるのである。舞が濟むと、松明が先に立つて一同庭へ下り、走つて行つて石段の右側の所へ御幣を納めて來て再び湯釜の前で舞ひ、神前に向つて拍手して終る。

こゝで切替へと云つて申上げの歌ぐらがあり、次に御面形迎へになる。

御面形迎へに行く者は、穢のない神子が、神前で御神籤を引いて當つた者三人が行くのであつて、此れは實に名譽な役目で重大な任務である、三人は烏帽子直衣の裝束で、提灯を持つ二人の

子供と共に、神前で御祓を受けて出發するのである。

暫く經つと火王水王社から面形を迎へて來るが、この間に湯祓の行事が濟み、更に東方淺間神社の御湯が行はれる。之も御湯一口に舞四立である。丁度、舞の中頃に御面形迎へが面形を箱に入れて恭しく捧げ持つて來る、此の時拜殿へ幕が下りて面形は幕の中へ入り、大太鼓（樂頭樣）の上へ置いてお祓がある。火王、水王、翁の三面は神前へ安置（すゑませる）して拜見することが出來ない。此祓が行はれる中は樂頭樣を使ふ事が出來ないから舞の調子が無くなる、すると、今までの神樂は忽ち『がつたく舞』と云ふ調子なしの舞に變つて、神子四人は御幣と鈴とを持つて恐ろしい勢でまるで『がらくた』の舞をする。幕の內の行事が濟んで太鼓が元の位置に戻ると、又元の靜かな舞になるのである。舞終つて御湯一口を立てゝ終る。

次に本社諏訪大神の御湯が行はれる。御湯一口に舞四立は前と同じであつて、諏訪大神と共に二宮として併せ祀つてある白羽の大神、宮土公御神、日月神地の御神、禰宜宮御神、關殿の御神へも御湯を上げるのである。

次は日吉八阪神社の御湯、同じく御湯一口に舞四立、歌ぐらがある。

夜は益々更けて、庭の大火もとろ〳〵として崩れんとしてゐる。湯釜の火は相かはらず燃えし

きつてゐる。氏子の者は老も若きも爐端を圍んで睡氣を催し勝ちである。急に、大太鼓の音が鳴り渡つて足音高く神前の幕の内から躍り出たのはたいきり面である。たいきり面は松明を切る意で、又道あけ樣とも云ふ、赤いしやつと赤い股引で丸い紐の帶をしめ、草鞋履きの扮裝で大きな斧を持つてゐる、耿々たる眼光、頭には二本の角を生じ、長く髮を垂れ牙をむき出した眞赤な面である。斧を振りながら五方を拜して舞ふ其の左右へ松明を持つた神子が立ち、斧と一緒に松明を振るのである、舞が酣になつて來て斧を振つて松明を切る、火は舞堂一面に散亂して火の海と化し、物凄い場面を現ずるのである。最後に、湯釜を廻つて五方を拜して舞は終る。

次は獅子の舞である。幕の内より、

『千早振る天の岩所を押開き此處が高天の原なれば神々樣もしろしめすらとあらたまる』

といふ歌ぐらが聞える。續いて、

『富士の白雪朝日で解ける大やれそうだいな』

の歌の拍子で獅子が舞ひ出る。一人が獅子を冠り、鈴を兩手に持ち、一人は『ほろ』を冠つて後へつく。五方を拜む舞が濟むと獅子は舞堂の眞中に踞る、そこへ禰宜が笹を振つて出て來る、獅子は此の笹の葉の音にじつと耳をすましてゐるが、やがて笹を目がけて嚙み付く、これは奥山に住む獅子の笹食みと云ふのであつて、舞も仲々堂に入つたものである。

これが終つて、鬼神の舞に移る、鬼神面である。兩手を後ろへまはして鬼神棒を持ち、背中に立てゝゐる、躍り出て座で三度、湯殿へ三度、樂へ三度、合せて九立舞ふ、之は足踊りの舞である湯釜（御殿とも云ふ）を廻つて行くと『もどき』と云つて禰宜が鬼神の行く道をとがめる。そこで押問答がはじまり禰宜と鬼神と組み合ひがはじまるが、鬼は遂に鬼神棒を取り上げられて仕舞ひ、上着を着せて貰つて舞ひ出す。そこで神子一同が歌ぐらを奏す。

『ありがたやまことのしんがひくにひかれぬこのさかき』

此の舞の中へ次の天公鬼面が出てくる、此の面は撞木杖を持つて舞ひ出で、五方を拜してから先の鬼神面と背中合せをして舞ふ。之を『せいくらべ』と云ふ。『せいくらべ』がすむと、鬼神面は幕に入り天公鬼面は御殿へ廻る。又押問答『もどき』があり、撞木杖を取られて上着を着せて貰つて舞ふのである。之にも歌ぐらがあつて神子が揃つて合奏する。

『かしやせかやせ清めでかやせ』

又此の舞の中へ青公鬼面が八角の撞木杖を持つて出て來る。大そう鼻の高い青い面である。五方を拜んでから天公鬼面と『せいくらべ』をして御殿へ廻る。此の面は位の高い面だと云はれてゐるから『もどき』がなくて、禰宜に撞木杖をあづけて舞ふ、歌ぐらがある。

『ありがたやまことのしんがひくにひかれぬこのさかき』

再び撞木杖を持つて舞ひ、幕の中に入る。其の次へ出るのは水王樣の面である。鎭目樣とも云ひ水の神である。左手に湯だぶさ、右手に小さい柄杓を持つてゐる、湯釜の火は盛んに燃え上る。松明を持つた神子と湯釜を中にして相對して立つ、水王樣は面を動かして鼻の先で水と云ふ字を書き、七水汲んで唱へ言を上げ、靜かに湯の周を舞ひながら廻ると、火が封さつて湯が沸え立たなくなり、禰宜が湯の中へ手を入れてかきまはす事が出來る樣になる。手に持つた湯だぶさで見てゐる者の所へ湯を振りかけるが少しも熱くない、舞ひ終つて幕に入る。

俄かに太鼓の音がして火王樣の面が現はれる、これは火の神樣であつて手には御幣を持つてゐる、松明の光で湯の中を覗きこみ、靜かに高い足どりで舞ひながら湯釜の周りを廻る、此の時、湯は元の通り盛んに沸え上つて來てもう手を入れることは出來ない。

次はやさしい翁の面の舞である。右手に鈴左手に扇を持つて舞ふ。

夜はほのぐと明け初める頃である。其の次へ日月の面が出る、日は男面、月は女面であつて各左手に扇、右手に鈴を持つて舞ふ。

其の次の神妻の御湯の行はれる時は已に夜は明け離れる、之も前の湯と同じく御湯一口について舞四立があり、歌ぐらがある。

以上で御湯立八口が濟んだ譯である。そこで御湯立濟みと云つて皆の神樣に御湯を差上げて止め湯となる、神子一同歌ぐらを奏す。

上湯を召せ上湯をば東方の神が受けてよろこぶ

これを五方唱へる。

東方やかゝれ神かゝらぬ神がましまさばかけて東地へ返します

此歌も五方唱へる。

此里は恐なる里で湯だぶさを直にたきゝにする里だ

これは三度唱へる。

奥山のと山のとびやかつらやひけどたぐれどとびやかつら

何ひろちひろ神がちひろ

各五方唱へて終る。

最後に火防の舞が行はれる、鎭火祭と云ふ、三つ舞で歌ぐらがある。

火の御子が火の山入りて今日七日火ぶせするまに夜がほげて明けてつとめでどこを下る

三人にて舞ひ、一度づゝ火を踏むのである。

以上にて祭は全く濟むのであるが、昔の鎭火祭には藁で『つと』(尺五寸位のもの)を作つて、之に木で三本足をつくりつけ、其の上に御幣を立てゝ鎭火祭をしたと云ふ。三月の酉の日の八幡祭のうさ祭に、八つ的の式に使用した直徑五尺八寸の的を燒いて、はざしの祭と云つた。この祭は三軒の家に分れてするのであつて、この家で各馳走をして全く鎭火祭が濟んだことになるのである。

南山の榑木祭り

榑木

榑木(くれき)とは木のかたまりの意味で、恰も土のかたまりを塊(つちくれ)と稱するが如くである。現在南山地方では屋根板の一束を一榑(ひとくれ)と稱して計數上の常用語としてゐる、また檜榑、椹榑などの名稱も殘つてゐる、木のかたまり故に榑木と呼ぶのであると思はれる。いづれにしても榑木とは材木と稱ばれる長大な容積の木ではなくて、長サ、數尺、巾三四寸に滿たぬ小割りにした木の斷片を指すのである。

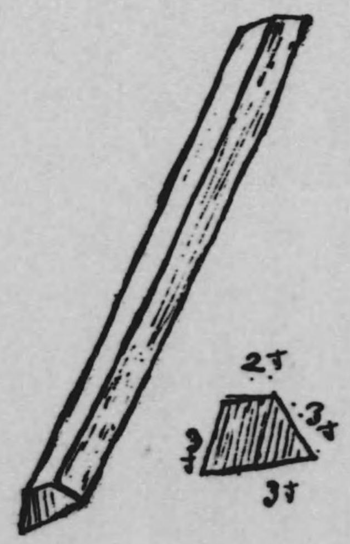
但し玆に云はんとする榑木とは、米穀を豐富に產せざる山間地方の、之に代償する一定の租稅の一種であると解釋する事にして置。くもつと地方的に解釋すれば榑木とは御年貢の事である、御年貢だから御榑木と尊稱する。

この御年貢として納める榑木にも國々地方に依り其寸法上に種々の相違がある、尾張物と稱し尾州領木曾産の椹榑木は長サ五尺一寸乃至六尺六寸に巾六寸乃至七寸五分、厚さ四五寸の規定があり、飛騨産の椹榑木は長さ六尺五寸とされてゐる、信州伊那地方の榑木は長短二種あつて次の如くである。

イ　長榑木　長サ三尺三寸　巾三方三寸
　　腹（表面）二寸
ロ　短榑木　長サ二尺三寸　巾三方三寸
　　腹（表面）二寸

材料はいづれも椹として、製材方法は鋸挽きでなくて、皆斧の割り製である、但し若木の二ッ割、四ッ割は禁じられてゐた。然しす法は場合により多少の變遷は有つたが四尺以上には出なかつた模樣である。

御榑木定めに依れば一本を一挺と稱し、石高との比率は高壹石に付榑木八拾三挺が昔の定め、其の後半減されて高壹石に付き四十一挺（四十一挺半とも云ふ）となつた。



伊那之南部に於ける榑木を納める處は

イ　鹿塩及大河原
ロ　清内路及野熊山付六ヶ村（上中關、向關、小野川、壹神、備中原、王子神樂）
ハ　小川及加々須（今の喬木村の一部）
ニ　南山（温田、田本、大畑、御佐野、野尾、矢平野、鹿科）
ホ　遠山（和田、上村、木澤、八重河内、滿島、鶯巣）

右は御料所（天下領）として尾張家の御與力、美濃八十一鱗の千村平右衛門の支配預りとされてゐた。

榑木祭りの行はれる南山は七ヶ村合せて石高五百八十五石二斗八升三合であつた、一と口に南山五百石と稱されるのは此の故である。祭禮も一名『五百石祭り』と呼ばれてゐる。

榑木に關する略説は此れに止めて、次は榑木領南山鄕の祭禮を記す事にする。

榑木祭りの今昔

御榑木祭りの日取りは、昔は七月廿日が漆平(しつぺいの)野、廿一日が我科(がしな)、廿二日が温田(ぬくだ)、廿三日が田本廿四日が大畑と云ふ順序で、五百石領内を五日間に亘り連續して行はれる祭りであつたが、其後各部落の都合に依り其の統一が亂れて現在は次の如く行はれてゐる。

七月廿九日　漆平野　小鷹神社
八月廿一日　我科　諏葉神社
八月廿二日　温田　諏訪神社
八月廿四日　大畑　諏訪神社
十月十一日　梨久保　池野神社

此の日取りに就き附記して置く事は、昔七月廿三日に田本に於て行はれてゐた榑木踊りが何故に廢されたかと云ふと、昔田本の野尾に屬してゐた梨久保の部落の人達を『野尾山衆(のやましゅう)』と呼んで居た、この野尾山衆が榑木踊りの藝能を辨へ居て、七月二十三日に梨久保の社を出祭して道中囃

しながら田木、野尾に至り、一夜を囃して踊り拔いて歸つたものである、現今は野尾、田本方面へ囃して里へ降りて行く事を廢し、山の上の自村のみで十月十一日に單獨で行ふことゝなり、以來田本野尾では榑木踊りは行はぬ事となつたのである。

春來れば白い蒲公英が咲くと云ふ『我科』は古くは『鹿科』と書いてゐた、何時頃より我科と書くやうになつたかは分明でないが、一村の地名に於ても今と昔の區別がある、從つて榑木祭りにも今と昔の比較をして見る必要を生ずるのである。

一　囃子

イ　樂器

大太鼓一ツ、小太鼓二ツ、鉦一ツ、笛四五本が今日の囃子道具であるが昔は一番太鼓、二番太鼓、三番太鼓と三通りあり、鉦も一番鉦、二番鉦の二通り有つたと云ふ。

ロ　囃子の種類

渡り拍子、そゝり拍子、宮神樂、櫻拍子、おうま、小囃子、祇園、岡崎神金小粒、

二　歌及踊り

イ　歌

笠揃への歌、館ぼめの歌、宮はめの歌、笠破きの歌の四種に類別する事ができ

る。

ロ　歌ひ方　始め音頭取りが一節を唄ふや、次は大勢にて之を受取り、又一度繰り返して唄ふ、其の間へ笛太鼓鉦にて囃子を入れ、また唄となる。

ハ　踊り方　最近復活した踊り方は、太鼓の拍子につれて柳の周圍をテンテンテンと三歩前進して、テンと一歩戻りつゝ背後に振り向く所作を爲す。

昔は一歌すむ毎に一回踊り、笠揃への始めより笠破きの終りまでに三十二回踊つたと古老は語つてゐる。

三　笠及衣服

イ　笠　今は檜笠を冠る、中には墨にてくれぎ踊と書いたのもある、格別の装飾はない。

昔は菅笠に紅白の長いシデを垂れ、花笠として美しく飾つて冠つた模様である。歌の中にも花をどり云々とか、踊る子供に云々とある所を見れば、この花笠は可愛い子供の踊り子に冠らせた事と思はれる。

ロ　衣服　今は何れの部落でも單衣浴衣の着流しや、シャツにズボン姿にて格別の統一はない。

昔は温田では紺の襠袴、紺股引、紺足袋、白緒の草履にて行列に出たと稱し、又簑笠にて行つた時もあつたと云ふ。我科では火消しのやうな装束にて、中には陣笠を被つた者もあつたと云ふ、皆いづれも古老の談である。

四　祭具

イ　柳　これは昔も今も變らずに一本である、柳は一本に限つたもので、竿頭には幣が付けてある。

ロ　切子燈籠　現今は二張であるが、昔は十張位は出たと云ふ。

ハ　小幡　今は諏訪大明神、燕大明神、八幡主大神等と書く、昔は其の他に熊野大權現、秋葉金比羅大權現其の他に村内の神佛の名を書いた旗が澤山行列に加はつたと云ふ。

五　湯立　今日は湯立など更に行はず、之を知つて居る者もないが、温田の温田家に殘された古い日記（徳川末期の頃のもの）に『本日祭りにつき湯立を爲す云々』と記されて居る。

六　祭りの宿　温田は今では相戸（あいど）と稱する家、昔は温田家も宿をしたやうである。大畑は六軒の家が毎年交代、漆平野は東西二軒交替にて我科は二の宮社殿を宿とす、昔は我科家であ

つたやうである。

右の例に依つても今と昔の相違はほゞ窺ふ事が出來るが、村の古老の語る處も精々七八十年以内の事で、其れ以上は知るべくも無い、また其れを記した文獻も目下の處現れて來ない以上、榑木の盛んであつた時代に如何なる動機に依つて『榑木踊り』と稱する特殊な踊が產まれて神に奉納する事になつたかは、たゞ南山五百石の神佛のみが知つて居る事であつて、假令誰が其れを書き誰が語つて見ても結局は一つの揣摩憶測にすぎないであらう。

左に榑木踊りの起原に關する村人の談を二三列記して參考にして置く。

說話の一

七年目毎に一回宛（時には毎年續いた事もあつた）村人全部が擧つて榑木山として定められて居る栃城（とちしろ）の奥の森林へ伐木に入るのは、村中非常な物要りであり又大役であつたが、其れも恙なく終了し、規定の石高だけ榑木の挺數を揃へて榑木役人に渡し、無事に上納が相濟みになつたと云ふ祭りであつた。

說話ノ二

山入りの時は山村の人々の例として、山神始め產土神に無事を祈つて山深く入り、幾日となく大木を伐り倒しては榑木を割り出して居たが、幸ひに神佛の加護に依り怪我もなくて下山する事が出來たそのお祭りの踊りであるから榑木踊りと稱すると云ふ。

說話ノ三

榑木出しの村人が、下山の折に山から携へて來た御榑木を、神木として神前に供へる時の踊りであるから御榑木踊と云ふ。

次にまた御榑木踊りが他の行事と錯綜せる點を記せば、

一　踊りの性質及笠、其他囃子などが『かけ踊り』に近い。

一　行列のあんばいが事神送り、蟲送り、風神送りなどに似通つて居る。

それ故に祭りと踊りの起原とか年暦などは明示することは六つかしい。踊の歌詞中に『頃は天正御時の頃云々』とか『寶暦年號の其頃に』など、歌はれて居るが、其れすらも確と信用するわけに

は行かぬ。而かし相當に古い古式の祭りと踊りであることは一見してもよく分かる。

神、踊りと囃子、榑木、この三つが南山の地で何時、如何なる動機で結合したのであるか、それは此處で云ふ事ではない。

祭りと部落

榑木上納の當時から、南山の内で巾を利かして居た我科家、温田家、御佐野家、市場家などゝ云ふ舊家の浚落は、祭りの方にも相當に影響を及ぼしたらしい、經費の負擔、祭りの飲食などが第一に目立つ。各部落内にも樣々な變遷は有つたが、昔温田が南山七ヶ村の中心となつて居た傳統は、祭禮に於て現在でも温田の榑木祭が一番盛んである事に昔の面目を維持してゐる。近頃榑木踊りの古式の復活を始めたのも矢張りこの温田の村人達である、此の影響は他へも及ぼして、我科、梨久保等でもそれを行ふ樣になつた。『大畑の坐り祭り』と名の通つて居た大畑でも踊りを練習し初めた。

御榑木領分であり、御榑木踊りを行ひ乍らも昔の榑木の實物を知つて居る人は村中でも餘り多くない。老人達でも明瞭な記憶が無いと云ふ位であつたが、此の頃（昭和八年八月）南山小學校長の加藤清薫氏が、平岡の鶯巢で發見された長短二本の榑木を持つて來て村人達の參考に示された、南山の各部落では之を見本として新たに榑木一對宛を造つて神社に供へて祭りを行ふ事になつた。

祭りの模樣はいづれの部落もほゞ同樣であるから、其のうち最も盛んであると云はれてゐる温田の祭りの見聞を次に記して見る。

温田の諏訪神社

温田村の祀る諏訪神社は、村の西向きに傾斜せる田園の裾を流れる天龍川の中央に、水面から抽ん出、て頂上（ォハチ）まで九十尺高さの『南宮』と稱する離れ島に祀られてゐる。島の面積は東西五十間南北三十八間、全島杉、檜、榊、松、姫子松、楓、椿、其他の老木が鬱蒼と繁茂し

所謂『南宮の森』の幽邃を示してゐる、この森の中に諏訪社のお使ひ蛇が棲んで居て、偶々其の姿を見せる相である。また昔この社の境内に、漆千本朱千本を何處かに埋沒してあると云はれ、『朝日さし夕陽輝く木の下に漆千本朱千本』の古歌が村人の間に口碑として傳誦されてゐる。

鳥居前の深淵には椀貸し傳說があり、やゝ離れて竹松樣の機織り譚がある。春來れば南山の處科には古來より純白なガンボ(蒲公英)が咲く、これを他村へ移植すれば黃色に變つてしまふと、村人は其れをひどく神秘に考へてゐる、眞白な蒲公英は何處となく神韻あるものと見受けられる。

島の頂上には不動樣の祠がある。此處に不淨の人が登れば何事か異變があると傳へ、婦女は此處へ登らぬことゝされてゐる。此の諏訪社の創建年曆は詳かでないが、慶長四年朝日受永に依り社領として高壹石を附せられた旨が記錄に殘されてゐる。明治七年以降には南宮森は官有地、御料地、社地に三區分されてゐる。

榑木踊りの行列は、南宮の森より遙か東方の相戸と稱する處を出發して、道中の堂宮に立寄り一と踊りづゝ踊つて愈々この島に到着するのであつて、云はゞ温田の祭りは諏訪社のみの祭ではなく、部落に祀らた神々其他悉くの祭りである樣である。

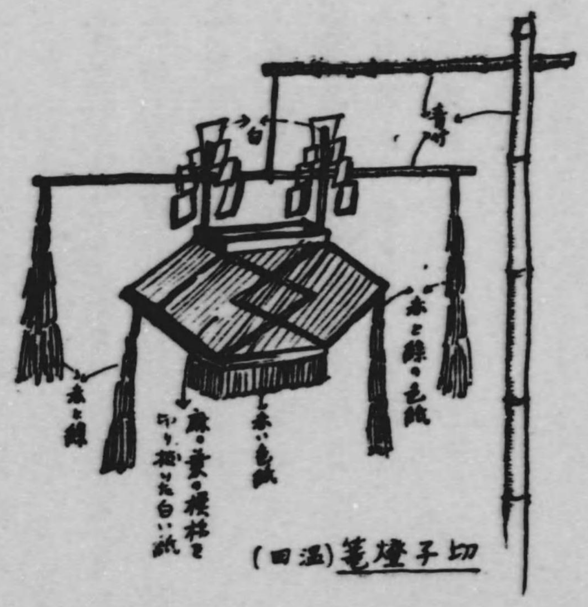
祭りの準備及祭具

八月廿二日、午前中を御庭草と稱し、村中集つて南宮の諏訪社境内の雜草をむしり、掃除が行はれ、續いて御藥師樣、權現樣、天王樣、山の神等の庭草刈りやら注連張りなどが行はれる。午后より青年連は熊野權現樣の庭で花火の仕度に取り掛かる。之と別に壯年及老年組は祭りの宿になる相戸と云ふ家に集つて、紙を切り、燈籠を張り、竹を割つて細いヒゴを造り、之に白紙を卷き幣を併せて榑木踊りに第一無くてはならぬ『柳』を造り小幡を組み立てるなどの準備に忙殺される。準備の品を記すと、

一　柳。一丈五尺位の青竹の先に藁を束ね、頂上に白い御幣を挿し、長く細く割つた竹ヒゴ

に白紙を卷き、紙片を恰も葉の如く挾み、其れを藁束に一杯に挿して四方に垂らす、其の形が柳のやうだから俗に柳と云つて居る。

二　切子燈籠　二個、長方形の燈籠枠の兩側面に二枚宛の正方形の飾り枠を付け、これに麻の葉模樣の切り抜を貼り、其の他赤青白の色紙にてシデ、垂れなどを附け、上部に二本幣束を立てる。



切子燈籠（溫田）

三　小幡　五六本、竿共に長サ二間程、諏訪大明神、八幡大神宮等と書く。

大畑にては矢張り諏訪大明神、八幡主大神と書き、漆平野にては燕大明神其他の幡である。

以上の準備が整ひ、貼り物の糊も乾く頃は夏の陽も漸く西へ傾きかゝる。

踊り行列の出發

午後五時、村人一同は宿の相戸の門に勢揃ひする、一樣に新しい檜笠を冠り、服裝は普通の單衣浴衣、まづ柳持ち役が庭の中央に立つと、之を中心として切子燈籠二つが向ひ合ひ、鉦太鼓と幡が向ひ合つて輪形を造る。

ヒューヒューヒューヒュルヒュー　ヒューヒュルヒューノヒューヒー

と簡單な笛の音が鳴りわたると太鼓と、鉦が揃ふて

ドーン〳〵ドンドコドン　ツクツクツクツ　ドン

カーンカーンカンカカカン　チンチキチツチ　カン

と渡り拍子を囃し始める、次に笛の調べも鉦太鼓も拍子を早める、『そゝり拍子』と稱して歌を出す前提の調子となる。

歌

御座を造れ座を造れ　これが子供の笠揃へ
古き時代の頃よりも　樽木踊と傳へある

頃は天正御時の頃　氏子殘らず集りて
事も變らぬ事なれど　三日三夜の精進して
御祭禮踊りの一しばい　輪座に造りてお聞きあれ
お末を申せばまだ長い　御祭禮踊は之までよ
と愈々榑木祭りの序歌は悠々と歌はれる。

古い歌謠が持つ特長の、何處となく御詠歌に似た唄ひ方て、『御座を造れ座を造れ』と一節を音頭取りが先づ唄ふと、大勢の者が之を復唱して後へ附ける、其間へ笛と太鼓鉦で渡り拍子の囃子を入れる。この序歌を『笠揃へ』と稱し、この祭りに與かる一同の勢揃ひの意である。

此の間、柳持ちは柳を絶えずゆらり〳〵と搖り動かしてゐる。

『館ぼめ』　次は祭の宿たる相戸家を賞め奪く唄と囃子

遙かでお庭を眺むれば　四角四面でさて美事
屋敷を遙かで眺むれば　東用水西街道
坪木をはるかで眺むれば　金木銀木植え並べ
館をはるかで眺むれば　飛彈の匠にたくまして

武田の番匠に建てさせて　さても美事な御やかた
お末を申せばまだ長い　お祭禮踊はこれ迄よ

○

かじやせき屋の山の神　御祭禮踊を差上げる
山住樣へも差上る　當家殘らず祝ひてん
御祭禮踊を差上る　家内無病と守らせよ
五穀成就と護らせよ　當家の御きさよ(吉凶か)にひとしばい
お末を申せばまだ長い　御祭禮踊はこれまでよ

以上を宿の相戸の前で歌ふ、即ち當家の建築を賞め、庭の造りや庭木を賞讃し、續いて家内の安全五穀成就を希ふ讃歌である。唄が止みまた一しきり囃子を入れて愈々出發である。先づ柳を先頭として燈籠に幡、囃子方の順序で其後へ一同がぞろぞろと續く、囃子は盛んに渡り拍子で囃し、澄んだ鉦の音は山々に谺しつゝ、道中氣分濃厚に鄙びて、行列は村の小徑を西へ向つて降りて行く。

昔はこの道中を七五三と云ふ足の踏み方でやり、其れに準じた道行であつて、近頃の様な自由勝手なぞろ〳〵道中では無かつたと老人は語る。

宿を出て南宮の森へ到るまでの間、各所に堂宮が祀られてある。篤實な村人の行列は必ず其の庭に立ち寄つて宮ぼめの一くさりを囃す事を忘れない、これは昔ながらの仕來りだと云ふ。

宿の近くの御藥師様の前で唄ふ宮ぼめの歌

お藥師様へとまづ入りて　御祭禮踊りの通りがけ
お藥師様へと差上る　あたりにまします祝ひてん
お祭禮踊を差上る　云々

天王様の庭にて唄ふ宮ぼめの歌

天王様へとまづ入れて　御庭を遙かで眺むれば
四角四面でさて美事　鳥居を遙かで眺むれば
黄金の鳥居でさて美事　御社頭遙かで眺むれば
飛驒の匠にたくまして　武田の番匠に建てさして

四棟造りでさて美事　お末を申せばまだ長い
御祭禮踊はこれまでよ

○

宮立遙かで眺むれば　檜榁を植え並べ
榙が茂つて本透いて　さても涼しき宮建よ
栃城入りにましまする　大崎君崎の山の神
お祭禮踊を差上げる　お末を申せばまだ長い
御祭禮踊はこれまでよ

○

宮立遙かで眺むれば　櫻杉の木植え並べ
うらが繁りて元すいて後　は竹籔とりまいて
七竹八竹の種類あり　さても涼しき宮立よ
こゝにましまする津島　様お末を申せばまだ長い
氏子殘らず集りて　三日三夜の精進して

御祭禮踊をまづ仕立て　御津島樣へ差上る
けものゝわざを除け給へ　害蟲害鳥よけ給へ
お末を申せばまだ長い　御祭踊はこれまで

夏燒上の山の神の宮ぼめの歌

通りがゝりの花踊り　夏燒上の山の神
御祭禮踊を差上る　お末を申せばまだ長い
御祭禮踊はこれまで

大古平峠の宮ぼめの歌

通りがゝりの花踊り　御祭禮踊を差上る
猪岩樣へ差上げる　姫宮樣へもさしあげる
がらんどう樣へも差上げる　受けて嬉びたべたまへ
降り來る災難あいよけて　氏子無病と守られよ

五穀成就と守られよ

斯くして博木踊の長い行列は、笛鉦太鼓の囃子で夕日の射す山の尾根道をぞろ〳〵と、天龍川目指して麓の方へ下りて行く。途中の御堂や小祠は決して素通りしない、丁寧に柳を振りつゝカーンカンと鉦の音を澄み渡らせつゝ、宮ほめの讃歌を奉つては次から次へと移つて行く。各社に詣でゝ熊野權現樣の庭へ着く頃は、さしもに長い夏の陽も沒してあたりは薄暮の夕靄が引く頃となる。村人達は手に持つた柳も燈籠も幡も一切を熊野社の社前へ立て掛けた後、夕食の爲に各々家へ歸つて行くのを毎年の例としてゐる。

夕食を濟ましてまた熊野の境内へ集合する頃は完全に夜景となり、此處にて燈籠には灯がともされ、花火連中の高張提灯も赤く灯されて、宵祭りらしい情景となる。勢揃ひが出來ると宮ほめが始まる。

熊野社宮ぼめの歌

權現樣へとまづ入れて

お庭遙かで眺むれば　四角四面でさて美事
鳥居遙かで眺むれば　金の鳥居でさて美事
石段はるかで眺むれば　みかげ揃ひでさてみごと
御社頭遙かで眺むれば　（中略）
宮立はるかでながむれば　檜杉の木植えならべ
前に立ちたる大榊　梢が茂りてもと透いて
さても美事の榊あり　古き時代の頃よりも
熊の林と音に聞く　さても涼しき宮立よ
こゝに鎭座ましまする　熊野白山大御神
お末を申せばまだ長い　御祭禮踊はこれまで

渡り拍子となつて囃しつゝ熊野社を出ると、次は直ぐ下の秋葉様、金比羅様、天神様の三社に詣で、矢張り宮ぼめの唄を、『通りがゝりの花踊り云々』とやつて、盗難火難の無からん事を祈り、急な坂道を下ると滿島へ通づる道へ出る。其處に昔の大屋（おほや）たる温田家があつて、同家の坪庭

の中にお稲荷様が祀られて在る、そこでまた一しきり『宮ぼめ』が行はれる。此處まで來ると天龍川も直ぐ目の下に近く、瀨音が山峽の祭の夜を響き渡る。街道に出た加減か、見物人が大勢集まつて來る。唄の切れ間、囃子の切れ間には草むらの鈴蟲の聲が耳につく。一體この温田から大畑へ掛けて天龍川沿ひは一帶に鈴蟲が非常に多い處である、恐ろしく繁殖して啼きしきつてゐる。行列は愈々南宮の小橋を渡つて森へ來た。

南宮の境内の行事

愈々南宮の森へ到着した。境内の雜踏を分けて行列は庭の中央に柳を立て、燈籠、幡、囃子方其の他一同が輪座を造り、見物人の多いせいか音頭取りも皆の者も一段と聲張りあげて諏訪社への『宮ぼめ』を唄ふ。

其れが濟むと一段落、暫時の間博木踊りは休憩である。花火組の若い衆と子供は神前に供へてあつた玉箱を擔ぎ、叩きながら熊野神社傍の花火打揚け場迄練り登つて行く。

花火打揚、續いて庭前の三國が濟むと、庭の舞臺で激しく太鼓が鳴らされて、神輿を擔いだ組の連中が太神樂を始める。

『柄は三尺のおのさを持ちて、悪魔を拂ふ芽出度いナー太平樂世と改まるよ』云々と稱して獅子が鈴を持つて舞臺で鈴の舞を行ふ。

一　代神樂

一　地狂言

右二種の舞臺上の演技が濟むと、この祭りの最終行事たる『笠破き』が行はれる。例の如く柳中心の輪座が造られ、音頭取りがまづ囃子に乘つて音頭の第一節を唄ふ。

笠破きの唄

東西靜まれ穩かに　靜めて小うたをお聞きあれ
頃は天文御代の頃　御上樣より御發布で
庄屋の指圖に集りて　三百有餘の百姓が
山へ登つて木を伐つて　南宮島へと送り出し
天龍御樽木下すとき　鎌倉殿の御逼足
此所は時又川岸か　通る筏に打ち乘りて

げきもちようしも打乘りて（註　げき及ちようしは天龍川の急流や難所の名稱）
此處は溫田の南宮か　これへお登り遊ばして
天龍川の眞中に　かけず崩れず岩立ちの
さても堅固な宮立よ　又もおはちに打登り（註　おはちは岩頭の意）
朝日輝く景のよさ　夕陽たなびく風凉し
椹千本杉千本　こゝに御樽木積下し
南宮島の祭禮に　お樽木踊行はれ

○

むかひと山の淺池で　姫子小女郎が菅を刈る
何にするとて菅を刈る　簑じやあるまい笠であろ
これで作りたさんど笠　天龍下りのしぶき除け
これを神社に納め置き　お樽木踊りとり揃へ
踊る子供に打着せて　一節揃へお目にかけ

氏子殘らず集りて　お受致した折柄は
笠を頂きおかはりに　これをお持ちてしぶきよけ
またも筏にうちのりて　いさ皆さらばと漕出でる
送り迎への笠やぶき

以上を以つて終りとする。

笠破きとは稱するが格別に檜笠を破き燈籠を壞る氣配もない、只歌があるのみである。期待する處は、此の終局に何事か有つて當然と考へられる。恰も遠山の霜月祭の終りに釜割りの行事が行はれ、新野の盆踊りの終りの踊神送りに、刀を拔いて道切る行事が行はれる如くである。笠破きのみでない、榑木祭全體を見て、踊りにも服裝にも何れの點にも昔つては古式の澁い鄙びた中にも典雅な行事禮式が行はれてゐたであらうと考へさせられる節々が澤山に發見せられるのである。故に榑木祭りの名に誘はれて遙々參觀に赴いた者は、最初の期待に背いたものが胸に殘る。

温田部落を始め南山一帶の人々は此點を悟り、昭和八年八月の祭りより古典復興に志して、ひたすら村の老人達に昔の踊りの古式を尋ねてまづ第一に踊りの足踏みと振りとから其れを實行する事となつた。やがては古式の儘の榑木踊りの昔に還すのだと云つて居る。

さて『笠破き』の歌が濟むと村人は各々解散となる。

廿三日　諏訪社の例祭、氏子一同肴一重宛持參して神酒をあげる。
廿四日　祭りの後片付け、大幟を降ろし其の他祭具一切の仕末、祭り費用の勘定等。

（附）風祭り

此の日に南宮の森の中の最も高い樹の未梢に幣束を一本を立てる。之を風祭りと云つて居る。

御榑木之歌

この祭りの歌を類別すると『笠揃への歌』『館ぼめの歌』『宮ぼめの歌』『笠破きの歌』の四種に分つことになる。温田、我科、漆平野、大畑、梨久保の歌を全部蒐集して見れば、隨分と澤山な數である。古い歌もあれば近年のもある、一部落の内でも館ぼめの歌詞が幾つもある、音頭

とりと皆の者が談合して踊り歌の選擇を時々する模樣である。

『館ぼめ』及『宮ぼめ』の內容を見るに、全く極度の讃辭で埋まつてゐる、此れを其の儘に信じたら大變な事だ。南山の神社の構造は社殿が板葺で瓦葺は尠い、社勢所、象舞臺は麥藁葺の至つて簡素な建物である、お祭り事だから負けて聞かなければいかぬ。

歌詞を比較して見ると、いづれの部落のも似通つて大差のないものである、次に代表的な歌詞を記す。

一　笠揃への歌

イ　温田

御座を造れ座をつくれ　御座を造りて歌を聞け
一節揃へてお目に掛よ　御家の御祈禱にひとし
お庭遙かで眺むれば　四角四面でさて美事
やかた遙かてながむれば、云々。

ロ　漆平野

東西靜まれお靜まれ　靜めて小うたをつけ流せ
いつも變らぬ事なれど　當所殘らず總氏子
前なる小川で垢離をかけ　三日三夜の精進して
祭禮踊を仕立るは　これのお庭で笠揃ひ
お庭遙かで眺むれば　四角四面でさて美事
お末を申せばまだ長い　さいれい踊はこれまでと

二　館ぼめの歌

イ　大畑

遙かでお庭を眺むれば　四角四面でさて美事
本宅遙かで眺むれば　八間四面の總二階
馬屋をはるかで眺むれば　七間厩に馬七ツ

毛揃ひなされてさて美事　こゝの主人は馬好きで
三百兩の金を持ち　木曾の馬市馬買ひに
お末を申せばまだ長い　さいれい踊はこれまで

ロ　漆平野

家のかたちをまづ見れば　飛驒の匠にたくまして
武田の番匠に建てさして　八ッ棟造りでさて美事
表のお藏をまづ見れば　錢倉穀倉文庫藏
中なるお倉に穀を詰め　坪木塲遙かでながむれば
桔梗刈萱植えまぜて　拾二一重の花咲いて
お座敷遙かで眺むれば　備後表が千疊ばか
綾に錦のふちを取り　毛ぬき合せに敷き並べ
唐紙障子が千本ばか　銀の屏風が千双ばか
床の間遙かで眺むれば　京からおりた……

ニ　温田

台所遙かで眺むれば　百人暮しと相見える
お茶の間遙かで眺むれば　十二一重のおひさきが
鎗の間遙かで眺むれば　鎗や長刀鎧櫃
其に馬簾や突棒や　戰道具は皆揃ひ
さても美事や　麗しや
上の間遙かで眺むれば　金の唐紙立てならべ
敷物遙かでながむれば　備後表に蓬萊べり
床の間遙かで眺むれば　欅づくめでさてみごと
掛物遙かでながむれば　狩野法眼お手筆で
三幅一對さて美事　お末を申せば長けれど
お祭れい踊はこれ限り

ホ　漆平野（宮島の庭にて）

伊勢からおりた繪圖もある　狩野の書いた墨の繪も
三社の託をとかけならべ　地の内殘らず祝殿
祭禮踊を差上げる　受けてよろこべたまはれよ

ハ　温　田

兩村殘らず集りて　此處のお庭を眺むれば
四角四面でさて美事　御門口遙かで眺むれは
四ツ足御門でさて美事　本宅遙かで眺むれば
八間四面の總二階　お家の旦那は馬好きで
曳子を三人曳連れて　木曾の市場へ馬買ひに
馬がよければ値は云はぬ　紅鹿毛揃ひの馬を買ひ
この馬いくらと問ひたれば　七ッで五百と五十兩
七間厩に馬七ツ　毛揃ひなされてさて美事
お末を申せば長けれど　おさいれい踊はこれ限り

いつも變らぬ事なれど　踊る子供を引つれて
これのお庭へまづ入れて　お庭をはるかに眺むれば
南下所でさて美事　後ろ松山前は河
東は井戸でさてみごと　鎌倉子孫と打見える
お家は繁昌とうち見える　これは踊の花の木に
鳥が住むやらとまるやら　鳥が住むから花が散る
さらば鳴子を掛けましよか　鳴子を引くには誰がよかろ
しもでかな屋のおとむすめ　お末を申せばまた長い
お祭禮踊はこれまでよ

三　宮はめの歌

イ　漆　平　野

これより二里餘の奥山に　これより名高き榑木山
中に栃城神社あり　檜　杉　松　姫子
樅樫から杉しげりては　さても見事な榑木山
寶暦年號のその頃に　榑木踊の仕來りを
祭禮踊と稱しては　栃城三社へ差あげる
栃城樣へと差上げる　受けてよろこび給はれよ
氏子揃へと思召せ　お末を申せばまだ長い

ロ　温　田

瑞神門遙かで眺むれば　左大臣には右大臣
右と左にお昇り台　お山に上りてさて見れば
八幡樣や諏訪樣の　お普請遙かで眺むれば
飛驒のたくみにたくまして、武田の番匠に建てさせて
諏訪の和四郎に刻まして　さても美事な御境内

お末を申せばまだ長い　お祭禮踊りはこれかぎり

ハ　温　田

東西靜まれおしづまれ　靜めてお歌をお聞きあれ
こゝは南宮の宮嶋で　浮世にゝゝゃゝと聞えある
うしろは大河前は池　さても堅固な宮島で
お鉢に立ちたる御不動樣　お不動樣へと差上げる
辨天樣へと差上げる　竹松樣へと差上げる
受けてよろこびたびたまへ

ニ　温　田

いつも變らぬ事なれど　御諏訪樣へと一踊り
八幡樣へも一踊り　この宮あるじの御神へ
御祭禮踊を差上げる　兩村主の御神へ

御祭禮踊を差上げる　お伊勢樣へも一踊り
金比羅樣や秋葉樣　御祭禮踊を差上げる
日本岳々殘りなく　お祭禮踊を差上げる
供へ殘りはござるとも　お受取はづしの無い樣に
お末を申せば長けれど　お祭禮踊りはこれ限り

ホ　漆平野

浮世をめぐりし虛無僧が　一夜の宿をとりはづし
そこで虛無僧くどきには　風にもまれし七子(ひちこ)鍼(やな)
雀に一夜の宿を貸す　駒に蹴られし道芝が
螢に一夜の宿をかす　なぜに虛無僧にや宿がない
京から雀が三羽來て　岸の小松に宿をとり
何と轉る出ておいで　一羽の雀の云ふ事にや
世のなかよけれ世もよけれ　浮世豐かと云ふて啼く

地(ち)の內殘らず祝殿　祭禮踊を差あげる
いつも變らぬ事なれど　氏子揃と思召せ

四　笠破きの歌

イ　大畑

むかひとやまの菅池で　山元小女郎が菅をかく
何にするとて菅をかく　簑にするとて菅をかく
簑じやあるまい笠だらず　笠に仕立てゝ冠らして
踊る小供に打着せて　鳴物類を皆集め
これが踊りの笠破り　四手(し で)も柳も皆集め
幡も殘らず皆よせて　これが終の笠破り

御祭例踊りは之限り

○

おいらは奥州出羽の國　家内五人と引連れて
遠州秋葉へ神參り　廻り廻つて來るうちに
信濃の飯田へ着致し　前にはお堀を引廻し
後ろに名高き谷川を　東に大きな天龍川
南に松川下に見て　飯田樣とは聞きたれど
さても堅固な城構へ　お末を申せば長けれど云々

ロ　漆平野

われが弟の仙松は　今年はじめて田を作り
稻はしかるゝ鎌はなし　關の鍛冶屋へ鎌打ちに
一年待ちてもまだ來ぬか　二年待つてもまだ來ぬか
三年三月に文が來た　文の上書をまづ讀めば

すぐに鍛冶屋の聟となる

○

われが弟は馬喰ふで　しばき信濃へ馬買ひに
しばき信濃に馬なくて　越後の府中へ馬買ひに
越後の府中にや馬もある　七軒うまやに馬七ツ
どれが目につく馬喰どの　中なる厩の蔭の駒
値をば幾らと思召す　買へば七十五兩ばか
七十五兩で買出して　たけしが峠へ乘りいだし
武石が峠で日が暮れて　武石がとこへ宿をとる

深見の夏祭り

水の祭り

大下條村深見の夏祭り、俗に深見の祇園と呼ばれてゐる村社の祭りは、山の下伊那の祭りの中で、水と緣の深い點に於て他とは異り、他の祭では味はれない情緒がある。山に提灯、川に舟、といはれる津島の祭りや、金魚花火で名高い菅生池の祭には比較すべくもないが、御神輿をのせた筏の影、水の上を渡つて來る悠長な囃子の音、小波に碎ける美しい花火の影、社の境内には御山飾りの提灯の灯がかゞやいて、岸邊の葦が微風にそよぐ樣など、此の祭りでなくては味はれない氣分が湧く。

夏に相應しい水の祭り、夏の水、水と禊、夏の祭とみそぎ、神のみそぎと人のみそぎ、等々の事が自ら考へられる祭りである。

池と神社

地質學の方ではどう言ふ事になつてゐるのか知らないけれど、一般の人達はこの池は陷沒によつて出來たものだらうと云つて居る。昔は深見七淵といひ、今の大池の外に、六つの淵があつた。それ等は淵田といふ地名を留めて居るに過ぎないが、此の邊は一體に低濕の沼地が多かつたのだらうか、社掌伊藤氏の話によれば、今の諏訪神社も昔は池の北岸に在つたのであるが、寛文十年に今の所に移轉したものだといふ。今諏訪の宮と云つて居る所がその跡で、產土田といふ名の田も殘つて居る。『寛文十亥年水多くして罷在る事出來ず字とうじと申す所へ引越申候』と舊記にある如く、諏訪の宮地籍が陷沒した爲か、餘りに池の畔に近かつたために增水の時など境内に浸水したか、浸水しなくても濕潤の爲に不便を感じたかして現在の所へ引越したものであらう。同村内の山田といふ所に山田といふ家があつて、代々禰宜をつとめ、孫太夫を名乘つて此の社を司つて居たが、寛文十年の移轉の際にもとうじの自分の所有地に移したのであつて、そのまゝ山田家の私有地で居た爲に、明治十一二年頃、森木の伐採の件について村と山田家との爭ひがあつたが、其の後村有地となつた。山田家では邸の附近に大山田神社といふ氏神を祀つて居て、

この神社や今の村社に關する記錄文書が數多く藏せられて居たが、山田家の家勢が次第に衰へるにつれて、之等の古文書も次第に腐朽散逸させてしまつて、俗に鎭西の大山田神社よりも古からうと言はれる程のこの由緒深い神社の歴史も判明しないといふのは誠に惜しい事である。

尙ほ朝日受永といふ人が下伊那各地の社へ社地を寄進して廻つた事があつたが、此の人は若い頃山田家の下僕であつたので。受永が其の後出世した事を知つてか知らでか、何の彼奴がといふ氣分で彼をあしらつた爲に、受永は大山田神社へも、今の村社の方へも絶對に寄進せずに行つてしまつた。それ故附近の神社には朝日受永の寄進といふ事があつたのに此所だけは寄進に洩れたのだと云ふ傳へもあるが、之に似た話は伊豆木にもあつて、眞僞の程は知れないが記して置く。

池にはぬしが居る。このぬしはもと川路のかいくらが淵に居たが、かいくらが淵が埋まつて其所に居られなくなつたので、此の池に移つて來たといふ。其の他の話では新野から來たともいはれてゐるが、その道中を味噌桶をかぶつて來たといふ話もある。（「伊那の傳說」深見の池の項參照）

神社は池の東方、二三町を隔つた丘の上にある。鳥居をくゞつて低い石段を登ると右手に社

務所があり、も一つ石段を登ると御庭がある。正面に又一段高く津島神社があり、庭の左手に諏訪神社、右手に舞臺がある。諏訪神社には他に天照大神、木花咲耶姫を祀る。津島神社の横手には數社の末社がある。

祭りの準備

八月二十三日　御庭草といつて境內の掃除其の他の準備を行ふ。部落內各戸一人づゝ全部が出て之をする。

二十四日　午前中に鳥居附近に大幟十數旒を立てたり、御庭に御山飾を作つたり、花火の櫓を組み立てたり、柳を作つたり、筏を組んだりする。

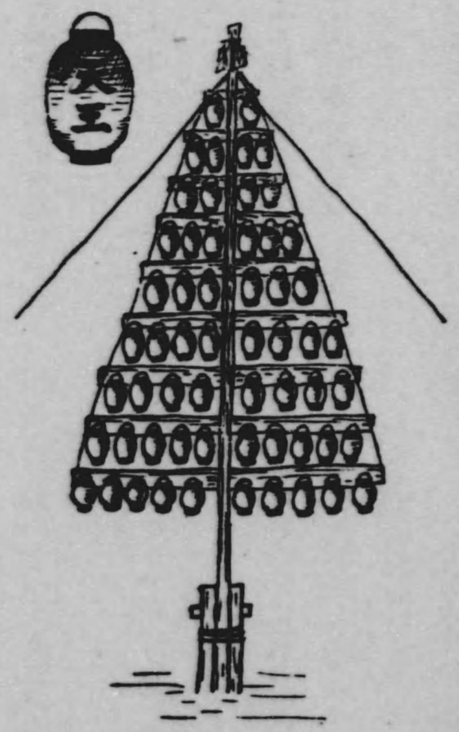
柳　髯籠（ひげこ）といふべきもの、其の形により俗に柳と稱ばれてゐる。八九尺の竹竿の先に藁を束ねそれに竹を細く割いた髯を差す、これには色紙を貼りつける。頂上には御幣を一本立てる。（榑木踊の柳參照）

お山飾　御庭のはしに立てる。一本の親木を立て、それに九本の横木をとりつける、横木は上

が短く下になるに從つて長く三角形の山形となる。これに五十八ヶのなつめ形の提灯をつるす、提灯には天王の二字が書いてある。

櫓 三國の櫓である。高さは四五間。

筏 青年の人達が作る。材料は池の畔に小屋が有こてそつに藏つてある。



長さ三間半、巾二間半、杉の角材を組み合せて板を敷き欄をつける。中央に九尺に二間の廣さの屋形を作り、その四本の柱には榊をつける。屋形のまはりには木瓜と梶の葉の紋のついた幕を張り廻す。屋形の前に高い竹竿をたて、之に十二ヶの提灯をつるす、これを『月並』といひ一年十二ヶ月になぞらへたものだといふ。この提灯をつけるのに竹竿を床の穴から水の中に突き込んで置いて、一番上のものから一つ〳〵つけては次第に竿を浮かして來るといふ一寸面白いやり方で

ある、尙四隅には四斗樽を沈めて浮きにして居る。

囃し方は中老連で、數日前より社務所に集つて囃子の稽古をする。樂器は笛と大太鼓小太鼓である。囃子の種類には岡崎、しんきんこつぶ、祇園囃子等の種類がある。

青年連は花火打ち揚げの仕度をする。打ち揚げ場は池の北岸の木立の中である。

池のきよめ 神官はみたらし(池のこと)の周圍のおんだしと稱する水の入口四ヶ所とどよぐちといふ水の出口一ヶ所に注連を張つて池のきよめをなし、此の日はみだりに池に入つたり水泳をしたりなどする事を禁じてゐる。

祭の役割 氏子十二組合の組長が年番で勤める、それを定めるにはみくじによる。氏子總代四人、耕地總代二人、神輿をかつぐ役四人、筏漕ぎの役二人である。他に笛吹き五人、大太鼓二人小太鼓二人が定められて居る。役員には服の無い者を選ぶ。

宵祭り

同日の午後八時頃に總代役員が參集、祭式開始、一通りの式があつて續いて御神體を神輿に移す式を行ふ。御移し申す神樣は三柱といふ事になつて居るが、祭神は四柱の爲、四神の中で天照大神か木花咲耶姫の中の一柱の神に殘つて頂かなくてはならないが、それを伺ふのには神秘な式があつて、社掌への默示によつて定まるのである。それが終ると御渡御となる。

行列

一 柳　行列の先頭に立つ。特志の志願者が持つ事となつて居る。

二 御先導　猿田彦面を大榊に結びつけたのを持つ。これも特志の志願者で、禮服着用。

三 獅子　獅子頭を被つて行列に加はるといふのみで舞は少しもない。持ち物も何もない。昔はほろ持ちが一人ついた由なれど今はなく、自分でまるめて持つて行く。

四 高張提灯　何々神社と社名を書いた高張が多數あつて、之を持つた者が續く。信心の者が持たしてもらふ、女の人が多い、但し若い女は少い。

此の高張の中に必ず大山田神社の高張がなければならない事になつて居るといふ社掌さんの話である。

五 幡　五色の幡であるがこれも女の人達が持つのが多い。高張も幡も全部ではないが半分位は殘つて行列の後につく。この幡も高張も信心によつて寄進されたものである。

六 神官　神輿　袴をはいた四人の組長が擔ぐ。

七 神官（社掌）　嚔子方　小太鼓二人首から前につるす。大太鼓は二人で擔ぎ、後の者が打つ、二組。笛五人、何れも袴はき。

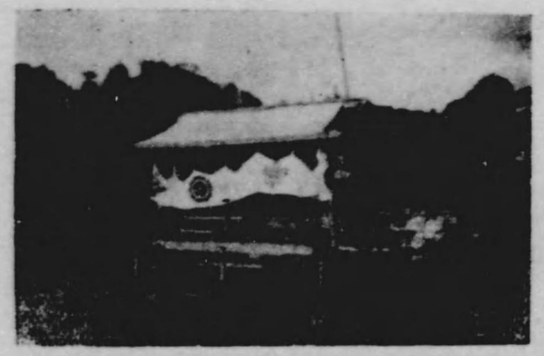
八 幡　高張提灯、小提灯の者など皆之に從ふ。

九 行列の後に青少年のキヲイが續く。出發前神前で玉箱諸道具等も共に御祓ひをしてもらひ、御幣のついた提灯に神前の火を移してもらつて練り出す。

渡御

行列の順序が出來ると囃子方が囃しを始め、柳を先頭とした行列は左廻りにお庭を三週して出發する。道中は絶えず囃しつゝけ、途中で青少年のキヲィ組は行列から別れて打ち揚げ場に行き、神輿は進んで池の畔に至る。

どよぐち附近で神輿は筏に移され、神官役員囃子方のみが供奉し、他は陸に居殘る。筏は囃しながら池を一週する。屋形につるした提灯の火影、月並の影、水を切る櫂の音。囃しは祇園囃子、切れ目の『ヨーイョーイー』とか『ドーンドド』などの掛け聲が面白く靜な水の上に響く。



一方打ち揚げ場に着いた青年組は花火の打ち揚げを始める。池の上を綱火が走つたり、金魚花火が打ち込まれたりすると、池の四邊の小道と云はず田や畑の土手と云はず、群つて居る見物人が『ワーッ』と喊聲を上げて喜ぶ。そして御祭り氣分に醉ふ。

還御

花火の終る頃には筏も池を一週して元の所から神輿は上陸し、先の順序で又同ぢ道を同じ樣に囃しつゝ神社へ還る。お山飾の提灯に火がついて美しい。庭に着くと又左廻りに三回廻つて御神輿は社殿に入り、三柱の神々を社殿に御移し申して遥御の儀を終り、又一と通りの式がある。

三國

打ち揚げを終つた青少年組は打ち場から神社へ練り込んで來る。庭の櫓に三國を取りつけて點火する。火の粉を浴びて櫓の下を狂ひ廻るあの興奮は、若者にとりては忘れられぬ祭りの夜の歡喜であり又誇でもあらう。

神前に火を返して宵祭りを終る。

三國が出てしまふ迄は見物人は歸らないので、始から終迄賑やかい宵祭りである。

本祭り

二十五日、午後一時から式がある。

大下條附近は一帶に秋の祭よりも夏祭が盛である。それは養蠶や農作等の關係上、秋祭りが廢れて夏の祭りが盛になつたものと思はれる。

山の祭り　終り

昭和八年十一月二十五日印刷
昭和八年十一月二十八日發行

定價九拾錢

著作者　伊那民俗研究會
長野縣下伊那郡飯田町七三九番地
右代表者　岩崎清美
長野縣下伊那郡飯田町一七七番地
發行者　山村正夫
長野縣下伊那郡上飯田町四五五六番地
印刷者　原田增藏
長野縣下伊那郡上飯田町四五六二ノ三番地
印刷所　研究社

不許複製

發行所　長野縣飯田傳馬町
振替長野六二〇八番
電話飯田二六七番
山村書院

岩崎清美著

伊那の傳說

四六版三五〇頁
總クロース洋裝
定價金壹圓八拾錢
送料十四錢

大好評

大正十二年に「傳說の下伊那」を書いて、其の採集の精密と、行文の輕妙とを以つて絶讃を博したる著者の研究は、其の後、日と共に進みて今回再び此の書を刊行する事になつた。古き文化を有する伊那谷の古を語る傳說は悉く收められて此の一篇の中にある。鄕土を研究する人にとりては貴重なる資料たると共に、一般家庭に對しても實に絶好の讀み物である是非共購讀せられんことを。

發行所　長野縣飯田傳馬町　振替長野六二〇八番　山村書院

山村書院版

651
26